

らむや。

然らば、猪は野蠻の動物にして、豚は文明の動物なり。豚は猪の進歩したるものに於て、猪は豚の未開なるものなり。

文明の歡ぶべく、野蠻の悲しむべき、豈敢て言ふを待たむや。しかも、人若し僕に向つて、然らば汝は、野蠻の猪を捨て、文明の豚を取らむと欲するかと言はざれば、僕は答ふるに、少々躊躇させて貰はむと欲するなり。

性質の痴鈍は、猪敢て豚に譲らずと雖も、突進の勇氣に至つては、豚遂に猪に及ぶべくもあらず。

「突進の勇氣」これ、現代人の最も缺乏するところ、僕この点に於て、野蠻の猪に學ぶところあらむと欲して、而してこれがために、文明の豚を取らざらむと欲するなり。

これを人間に徴するに、一片稜々の氣骨は、寧ろこれを、未開蠻カラなりし時代の男子に見ることを得むも、文明ハイカラなる現代人は、却つてその軟骨腐

腸なる、とてもお話しにはならざるなり。

野蠻と文明、猪と豚、古人と今人。ア、これ新年頭絶好の公案にあらずや。香を焚いて端坐冥想し來れ、靜中の動、動中の靜、心弦徐ろに鳴つて、而してこゝに省あらむ。

突進すること猪の如くなれ、爲す無きこと豚の如くなるなかれ。何となれば、猪突して始めてこゝに、自己新運命の開拓を成就し、眞文明の意義を見出し得べければなり。

「中腰」なる僕、今年こそは、亥年の本性を暴露し來つて、スツクとばかりに衝つ立ち上り、傍眼もふらずに邁往直前して費くば、「四十五十にして聞ゆるなきは……」など、二千年も前に死んだ、隣國のおぢさんから嘲られざらむと奮勵し且つ努力せむかな。(明治四十四年一月)

三、處世の要具

(一)はしがき

吾等が世に處する方法種々あるべきも、予の信ずる所にして誤りなくば、處世の要具に五種あり。何をか五種の要具といふか、一に曰はく健全なる身體、二に曰はく健全なる財政、三に曰はく健全なる思想、四に曰はく健全なる信仰、五に曰はく健全なる同情、即ち是れなり。若し人此の五種の要具をだに確持すれば、如何なる事に遭遇し、如何なる場合に立到るも、決して驚くにも足らず、騒ぐにも及ばず、従つて又、かの煩悶苦惱といふが如きものも、これなきを得るに至らむ。以下少しく、これ

に解説を加へむと欲す。

(二)健全なる身體

「活潑なる精神は健全なる身體に宿ると云へる諺もあるが如く、吾等が世に處するに當りて、まづ第一に必要なものは、健全なる身體なり。身體虚弱なるものは、如何なる大希望を抱懐するも、其の結果を收むること能はず、遂に社會の劣敗者、生存競競場裡の落伍者となるの止むを得ざる也。風にも堪へぬ孱弱なる身體を以つてして、頑健恰も鐵の如き丈夫と争はんとす、もとより不可能の事也。健全なる身體、その人の健康といふことは、人生の戰場に於いて、勝利者たるの榮冠を受くべき、第一の資格と云ふも決して不可なかるべき也。」

世に煩悶と呼び苦惱と叫ぶもの少からず、惟ふにこれ、身心の調和を缺けるもの、聲なるなからんや。予の知れる限りに於ても、清澤滿之、高山樗牛、綱島梁川等の諸氏は、その身體に異状なかりし時代に於ては、共に頭腦明晰思想剛健、誠に一代の論客として、理性の光り常に赫々を滅ぜざりしが、その一たび病に罹るや、感情の妖雲密集して、こゝに理性の光明を蔽ひ、或は日蓮に入り、或は親鸞に投じ、或は見神の實驗となり、その説くところ、到底これ病人宗たるを免れざるに至りしなり。

茲に於てか、吾等の注意せざるべからざるものあり、そは即ち新しき議論などに接したる時に、先づ其の議論の正否を考究する前に、其の主張者が、果して健全なる身體を有するか否かを考ふることこれなり。

多くの場合に於て、健康ならざるもの、議論は、正鵠を得たりと云ふべからず。かのニキチエの如き、一時は我が邦の思想界をも風靡したるは、讀者の既に知る處なるが、彼は自我弱くして、遂に自殺せる也。彼が思想は、其の肉體と共に弱きものなりき。概して肉體虛弱にして、健康不十分なるもの、議論は、偏癍にして且つ缺陷あるは、否むべからざる也。
而して後、元あり。

即ち健全なる身體は、すべてに於て優勝者たるの要具なり。元より身體の健康と否とは、先天的なるあり後天的なるありと雖も、各自の攝生により、例へば運動營養等によりて、或點までは身體の健全は期し得らるるものなり。健全なる身體が、如何に處世上大切なるかを思ひて、

吾等は、克己制慾、以て肉體の健康を保持せざるべからざる也。

(三)健全なる財政

倉廩實則知禮節、衣食足則知榮辱と云ひ、恒産なきものは恒心なしと云へる如く、苟くも社會の一員たる以上は、衣食するに何等の不安心なきものたらざるべからざる也。朝に衣の爲に心を勞し、暮にパンの爲に心を痛ましむるが如きもの、曷ぞ能く利他の大業を爲し得ひや。已れ衣食の爲に奔命に勞れて、他を顧みるの暇なかるべきなり。

如何にして健全なる財政を作り得べきかと云ふに、吾等の健全なる財政は決して富巨萬を積むの謂にあらざる也、有り餘る財産を擁するにあらざれば、健全なる財政なりと云ひ得ざるには非らざる也。唯だ

日常の生活に堪へ得ば、以て足れりとなすなり。若し多くの富を得んとならば、或は非常の困難あらむ、されど、自己の生活を支持することは、今日と雖も、出來難きことにはあらざるなり。勤勉、努力、たゞ自己の職業に忠實なれ、そこに健全なる財政は、成り立たむ。

更に儉素自ら持し、冗費を省き、簡單なる生活に甘ずるの心あらば、生存競争の荒波も、決して怖るゝには足らざるなり。今の時、今の人、華美に流れ、奢侈を迫ふ、僅に三十圓の収入しか無きものが、五十圓の生活をなさむことを欲求し、その得られざるや、即ち生活難と叫ぶ。曷ぞ知らむ、これ生活難にあらずして、贅澤難なり、奢侈難なることを。人若し三十圓の収入に對して、二十圓の生活を營まば、決して生活難など云ふこ

とはなかるべきなり。今の世は、人多く事業少しといふ、しかも、勤勉にして誠實なる人を容るゝの、餘地だに無しとはあらざるなり。今の世は、誠にせちがらしといふ、しかも、生活を簡易にし、儉素自ら持するものを容るゝの、餘地だに無しとはあらざるなり。

(四)健全なる思想

身體強健ならざるものは、常に病に冒さる。鐵の如く石の如き、頑健なる身體を有するものは、縦令激烈なる流行病中に居るも、これに感染することなきが如く、人の思想も、また羸弱なる時は、常に種々なる惡論邪説のために誤まられざらむとするも得ざるなり。

トルストイズム來れば、直にこれにかぶれ、自然主義來れば、又これに酔ふ。プラグマチズム唱へらるれば、速時これを賛し、社會主義唱へらるれば、又これに和すといふが如く、浮草や今日は東の岸に咲き、ただ風のまに／＼漂ふて、その何のところにか適従すべきやを知らざるに至る。

人として、人生の歸趣を知らず、こゝに於てか煩悶生じ、苦惱起る、宇宙の不可解を歎ずるもこれがためにして、人生の悲觀を訴ふるもこれがためなり。その華嚴の瀧に赴けるもの、淺間の火口に投じたるもの、畢竟これ、思想羸弱の徒たりしなり。

健全なる思想は、自由といふことを一ツの條件となさざるべからず。思想の自由とは、他によりて束縛せられざることとより論なく、又自

らの行爲によつて、これを束縛せざることをいふなり。他より束縛せらるるとは、利を略はされたるがために、正義を捨て、邪道に踏み込み、名を興へられたるがために、多年の主張を一朝にして擲つといふが如きの類にして、誠に醜にして陋、苟も男子の大に慚すべきところならずや。又自ら束縛するとは、例せば酒を飲むものが、如何に禁酒の利を説かむも、毫末の權威なく、放縱淫逸の徒の品行論が些子兒も聽くに足らざるが如く、身に暗黒の行爲あるがために、常に公明の論を爲す能はざるをいふ。縱令、その思想は健全ならむも、此の如く、束縛せられたらむには、これを施すに所なく、これを用ゐるに道なし。西郷南洲曰く、『獨行不愧影、獨寢不愧衣』と。吾等の行爲も、思想も、晴天白日の如くならず

るべからざるなり、何れに行き、何れに語るも、毫も心に疚しき處なく、遠慮する處なきものならざるべからざる也。『菜根譚』に曰はく、『心體光明暗室中有青天、念頭暗昧白日下生厲鬼』と。味ふべき言にあらずや。

(五)健全なる信仰

こゝに一門の大砲ありと假定せよ、砲身あり、彈丸あり、火藥あるも、未だ以つて用をなすに足らざる也。こゝに導火ありて、初めて其の活動を生ず。今此の健全なる身體は、猶砲身の如く、健全なる財政は、彈丸の如く、健全なる思想は、火藥の如しとせむに、たゞこの三種のもの備はらむも、世に處するに於て、未だしなり。即ち其の導火となるべきの信仰なくば、何等の活動をも爲す能はざるなり。實に信仰は處世の要具た

る導火なり、人生活動の源泉なり。

孔子曰く、「人而無信、不知其可也、大車無輓、小車無軌、其何以行之哉」と。

此の信と云ふは、未だ宗教的の信仰とは見るべからざるも、人生に信の必要なるは、今更こゝに言を費すの要なかるべき也。この信、これに力を加ふれば、則ち確信となる。孔子又曰く、「天生德於予、桓魋其如予何」と。これ孔子の確信なり、この確信あり、敵刃もとより恐るゝに足らざるなり。

又日蓮上人が龍の口に於て、白刃頭上に落下し來らむとする時に際して、泰然として、「此の醜き頭を以つて、彼の貴き法華經に代はることを得ば幸なり」と言へりしといふが如き、果して何の力ぞ。あゝ偉大なる

信仰の力のみ、健全なる信仰の力のみ。然り、人生の戰場に干戈を交へんとするもの、この種の健全なる信仰なくむば、それ甚だ危いかな。

親鸞上人越後に流されむとするや、乃ち曰く、「大師聖人（法然）若し流刑に處せられ給はずんば、我また配處に赴かんや、我若し配處に赴かずむば、何を以つてか邊鄙の群類を化せむ、これ尙師教の恩致なり」と。流刑に處せらるゝを喜び、配處に赴くことを厭はず、燃ゆるが如き信仰あれば也。堅實なる信仰あるものにあらずんば、争かて此の言をなし得んや。

ルーテルが、ウオルムスの會議に出席せんとするに際し、知友は之れを危みて諫止せしも、彼は假令ウオルムスよりウイテンベルグに至る

まで、一面に猛火を焚き列ねて、其光天を焦すとも、余は救主の名に依つて其の中を通らむ。」と、斷然その言を拒否して突進したるは、彼が胸中に不動の信念ありしが爲めなり。この不動の信仰は、遂に彼をして、宗教改革といふが如き、大事業を成就せしめたりしなり。貴むべきは我が健全なる信仰ならずや。

人生に處するに、健全なる身體あり、健全なる財政あり、健全なる思想あり、之れに加ふるに健全なる信仰あらば、之れ即ち俗に所謂鬼に鐵棒なるのみ、何の怖るゝものあらむや、何の逡巡躊躇するの要あらむや。苦痛なく、煩悶なくして、茲に人生の光輝あり、こゝに人生の光榮あり。

(六)健全なる同情

健全なる信仰の立脚地よりして、萬物を見る時、その心の奥底に、同情の念、油然として湧き出づるを禁ずること能はざるなり。佛教の慈悲と云ひ、耶穌教の愛と云ひ、儒教の仁と云ふも、歸する處は、この同情に外ならず。人の世に在る、相寄り相扶け、相愛することをだに忘れざらむか、世は太平にして人類は幸福なり。

然り、吾等は、爾の隣人を愛し、爾の敵をも愛するの雅量と同情とを有せざるべからざると同時に、又禽獸蟲魚の末に至るまで、これを愛し、これに同情するの心なかるべからず。否、管に然るのみならず、一塊の土、一杯の水と雖も、これを愛しこれに同情する心なかるべからざるなり。たゞ健全なる同情たるを要す、斷じて盲目的同情たることを得ず。

曾つて英佛戦争の際に、佛軍の捕虜となりて、數年間苦しき生活をなしたる一兵士、平和克復の後、故山英國に歸りて、ロンドン市中を散歩しつゝありしに、不圖鳥屋の前に出づ、籠の中なる種々の小鳥は、美しき聲にて鳴きつゝありき。一兵士は何思ひけむ、つと入りて、其の財囊を傾け盡くし、多くの鳥を購ひ、直に悉く之れを空に放ちて、心地よげに見えたり、群集は兵士の行爲を以つて、愚なることよと嘲笑しけるに、兵士は「數年間敵軍中にありたるものにあらずむば、籠の中の鳥の苦しさに、同情すること能はざるべし」と言ひて、群集の間に身を隠したりと云ふ。可憐なる一兵士の心！己が心を以つて鳥に施す、其の美しき同情の念は、床しきものにあらずや。

スコット曾つて、その日誌に書して曰く、今朝頭痛甚し、犬は昨夜吠え續けたり。可憐なる犬よ、彼れも亦昨夜は予と共に苦しみならむと。敢て徳禽獸に及ぶと稱すべからずとするも、その慈愛の念は、又以て籠とするに足らずや。又一茶に「やれ打つな蠅が手をする足をする」と云ふ句あり、一個微なる蟲に對するの同情、尙且つかくの如きものあり。又鬼貫にも「行水の捨てどころなし蟲の聲」といふ句あり、優にやさしき蟲の音驚かさむは、忍びがたしと云ふ風流の間に、不可言の同情ある、眞に美しきこゝろばへにはあらずや。更に千代女の「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」と云ふに至つては、人類以外、鳥蟲以外、植物にまで同情せるものなり。又かの道元禪師が、飲み残りの水を、路傍に捨つるに忍びず

として、わざわざこれを湖中に戻したりといふが如き、皆是れ健全なる信仰の基礎に立ちたる健全なる同情の發露にあらずや。

人みなこの心を以て心となし、この行を以て行となし、日夕懈ることなくむば、世に紛争なく、訴訟なく、戦争なく、警察なく、監獄なく謂はゆる天國地上に建たむこと、期して待つべきなり。

(七)むすび

數へ來れば、處世の要具、必ずしもこれに盡きざるべし。しかも、如上の五者を確持し、これを運用するの道を誤らずむば、吾等は、常に平穩と満足とを以て向上し發展するを得むなり。(この篇、上宮教會に於ける講演の大要を、宿利君の筆記して『雄辯』に掲載せられしものなり。)

▲佛・教・界・の・名・士・と・基・督・教・界・の・名・士

訪・問・記・者・あり、一日僕のところへ來て曰はく、「佛・教・界・の・名・士・を・訪・問・し・て・見・る・に、誰・の・と・ころ・へ・往・つ・て・も、妙・に・こ・う・尊・大・に・構・へ・て・居・る、無・愛・相・で、迷・惑・顔・を・し・て、碌・々・話・も・し・て、吳・れ・な・い・が、こ・れ・に・反・し・て、基・督・教・の・先・輩・は、ど・れ・も・こ・れ・も、皆・よ・く・打・解・け・て、謙・遜・で、ニ・コ・く・し・て、親・切・で、同・情・あ・る・話・を・し・て・吳・れ・る。一・體・ど・う・い・譯・の・も・の・で・し・や・う・か。」と。僕曰はく、譯・も・何・も・な・い・た・ど「佛・教・界・の・名・士・は、正・直・で、素・朴・だ・し、基・督・教・界・の・名・士・は、偽・善・で、修・飾・が・上・手・だ・と・い・ふ・こ・と・に・歸・着・す・る・の・だ。」
全・體・基・督・教・界・の・先・進・者・は、早・く・か・ら・外・人・に・接・觸・し、外・人・の・御・機・嫌・を・取・る・こ・と・に・腐・心・し・た・結・果、人・間・が・頗・る・外・交・的・に・出・來・上・つ・て・し・ま・つ・た・の・で、心・に・も・な・い・お・世・辭・を・言・ふ・こ・と・が・上・手・な・の・で・あ・る。人・を・そ・ら・さ・な・い・だ・け・の、手・練・が・あ・る・の・で・あ・る。こ・れ・に・反・し・て、佛・教・界・に・育・つ・た・人・々・は、一・ツ・に・は、子・供・の・時・か・ら、据・は・る・に・は・必・ず・上・座・、挨拶・は・成・る・べ・く・頭・を・高・く・と・い・ふ・風・を、見・眞・似・聞・き・眞・似・て・居・る・の・で、そ・れ・が・今・の・や・う・な、外・交・的・辭・令・を・歡・ば・れ・る・世・の・中・に・な・つ・て・も、な・か・く・抜・け・切・ら・な・い

佛・教・界・の・名・士・と・基・督・教・界・の・名・士

のと、二ツには、今の佛教界の先進は、大概苦學をしたもので、……今でも苦學の状態を續けて居る人が多い……晝夜間斷なく書齋に閉ぢ籠り、謂はゆる交際などいふことは、殆どないのである。言はゞまづ、鎖國的であつたのである。従つて人に接する方法などは、一向心得て居ないのが當然で、一見尊大にも見え、無愛相にも見えるのは、誠に止むを得ないことである。

故意にする愛嬌と、自然のままの不愛嬌とは、孰れが尊いか。人を偽らないといふ點から考へれば、寧ろ自然のままの不愛嬌を取るべきではあるまいか……と言つて、不愛嬌を奨励しやうといふのではない、眞心からの愛嬌が溢れるやうにあつてこそ、眞の宗教家であり、眞の學者である、基佛兩教界の先進各位、切に思をこゝに致されたい。

四、『させられた失敗』と『した失敗』

直に、事實の説明に取りかゝる。

神田の大火、沼津の大火、横濱の大火、日暮里の大火、深川の大火と、今年になつてから、各地の火事騒ぎ、聞くさへ凄慘の感に堪へない程である。罹災者の中には、他人の家に住んで居て、自分の商品五百圓位のものに、千圓も保険をつけて置いたので、結局類焼を喜んだといふものもある。そうだが、そんなのは全く例外で、大多數は、財産を失ひ、心身を傷ひ、甚だしきは、更にその上に、老父母や愛子を、病院に送つて居るものさへあるといふ。それも天災で仕方がないと、あきらめもしやうが、さて、元住んで居た土地へ、店舗を新築しやうといふ一段になると、地主の無慈悲なる、地代の値上げを主張して、それでいやなら、もう貸さないといふ、火災

『させられた失敗』と『した失敗』

のために、殆ど滅亡に近い境遇に陥つたその上に、永年賣り込んだ土地にさへ住めないとあつては、もう全く立つ瀬がないではないか。

火事のあつたを機會に、市區改正を實行すること、これまでの例になつて居る、三百年來の老舗が、市區改正道路取り擴げのために、立退きを命ぜられ、今まで賣り込んだ土地を捨て、知らぬ土地へ移轉の止むなきに至れるものもある、かゝるものの中には、從來住み馴れた土地に居てこそ、三百年來の老舗として、客足も多いのであるが、知らぬ土地へ移つてしまつては、全くの新規開業と、毫も擇ぶところがないために、相當の客足のつくやうになるまでには、随分苦闘もしなければならぬ。苦闘の結果、多少のお得意がつけばよいが、萬一思ふやうにゆかないと

すると、この老舗は、遂に、衰亡の止むべからざるに立至るのである。

縱令、その土地を棄てて、移轉しなければならぬといふ程のことにならないにしても、道幅は廣くなる、電車は通る一見、土地の繁昌を來したやうにもあるが、實は、客足の減ずること非常なものである。道幅の狭かつた時は、碌な店さへなかつた町も、人通りが多くて、押すな／＼の大繁昌を見て居たのに、一度、道幅が廣くなると、店舗は見違へる程立派になつて、しかも客足の減ずること、全く意量の外である、その上に、電車が通るやうになつたが、最期、大抵な人は、この文明の利器を利用して、ブラ／＼歩きをするやうな人は、次第に減ずるばかりである。場末の小賣商店が、この市區改正と、交通機關の整備とのために、どれだけ打撃を

蒙つて居るかは、自動車で駆け廻はつて居るやうな階級の人々の夢にも想ひ浮べることの出来ないところである。

それも仕方がない、市の発展のためである、多数市民の幸福のための犠牲である。しかし、たゞさへ増税々々で、年々税金が高くなる一方だのに、更に交通機關の整備といふことは、土地の位を上げて来て、従つて課税の標準が高くなる。萬事がそれに伴つて、日用必需の物品が騰貴する。今までは月々の経費が、五十圓で済んだものが、七十圓でも足らなくなる。商ひ高が減少して、諸経費が増して来る、これではやりきれぬ理窟がない。此くの如くにして、次第々々に衰亡し行くもの、東京市中だけでも、どの位あるだらう。火事のある度に、市區改正のある度に、

随分少くはないことと思ふ。誠に、悲惨なことではないか。

これに反して、少しの資本で商を始めた。どうした拍子の瓢箪から、駒が出る程の間違ひで、とん／＼とんと當りが續き、思ひも設けない懐の温かさ、小人壁を抱いて罪ありの格で、まあ一杯と、つい茶屋酒の酔ひ心地、藝者の膝を枕にして、テンと夢中の流連荒亡、これはと氣のつく頃は、もう手形の割引も利かなくなる、親類朋友も好い顔をしない、まゝよ、一攫千金と、相場に手を出す。今度は、トン／＼拍手の逆落し、もう二ツ進も三ツ進も動きが取れなくなつて、とゞのつまりは、夜逃げか身投げで、新聞の三面を賑はせる。

前者の如きは、即ち謂はゆる「させられた失敗」であつて、その悲惨、真に

『させられた失敗』と『した失敗』

同情に堪へないことである。チト筋の通らない言ひ分かは知らないが、僕は、彼等のために、衷心から天を怨み、文明を呪ひ、市區改正の罪惡を鳴らしたいと思ふが、後者の如き、謂はゆる「した失敗者」に對しては、縱令、彼等がどんなドン底まで落ち込もうが、そは彼等が自業自得であつて、聊かも同情する餘地がない。

元來成敗には、精神的成敗と物質的成敗とあつて、人間本來の面目から言へば、物質的成敗といふやうな、淺薄なものを、標的とすべきものではないこと、言ふまでもない。しかし如何に精神的成功を尊しとしても、一家悉く他人に救濟せられ、扶助せられなくては、生きて行けないといふ程、非物質的になつても困る。人を救はむと欲するものは、まづ自ら

救はなければならぬ。精神的成功の第一歩として、各人まづ、その生活の獨立を計らなければならぬ。生活の獨立、一寸聞くと、簡短なことのやうだが、今の時のやうに、せち辛い世の中となつては、男一匹、たゞ食つて着てゆくといふことさへ容易でない。況んや、一家、妻子眷屬の五六人もあつて御覽らうじろ、それを扶持してゆくこと、なか／＼以て尋常一様の事業でない。更に況んや成功をや、物質的成功をや。

然り、求めてもなか／＼得られないのが成功、求めないでも、遠慮なく來て呉れるのが失敗。その失敗にも、境遇から餘儀なくさせられる失敗と、自分でした自業自得の失敗とがあること、上述の如くであるが、何れにもせよ、かういふ六ヶしい世に處して往くには、たゞ、儉素身を持し、

勤勉事に従ひ、誠實に奮闘するといふことの外には何ものもない。失敗に力を落さず、成功に氣を緩めず、善とするところに向つて、驀直に突進せよ。處世の要道といひ、人生の妙趣といふも、詮ずるところ、この外にない。(大正二年四月『新修養』)

▲米の[●]高[●]い[●]位[●]何[●]だ

『米が一升三十錢もする、死ぬか生きるかの境だ、笑ひどころの段ぢやないぞ。』
『へ、エ、そんなら、泣くか怒りかすれば、腹がふくれるかね。』
『腹がふくれるかどうかは知らないが、マア試しに怒つて見ろ、腹の立つことだけは請合だ。』
『アツハ、、、。』
『ウツフ、、、。』

米が高くて、可笑しければ、矢ッ張り笑ふより外に仕方がない。僕の言はうと思ふところは、即ち此處だ。

道德だの、宗教だのと言ふと、如何にも高遠なものやうに考へて居る人も少くないやうだが、そんなに高遠なものでは、吾々凡人のお役に立たない。道德や宗教が凡人には用のないものだといふなら、格別だが、苟もさうでない以上、吾々凡人の、手の届き足の届くところに、道德もあり、宗教もなくしてはなるまい。孟子の言つたやうに、道は邇きに在るのを、人が勝手に遠きに求めるのである。事は易きに在るのを、人が勝手に難きに求めるのである。道德も宗教も、實は極めて手近に在るのであるが、それは如何にも遠くにあるものゝやうに思つて居るのは、その思つて居る人の方が間違つて居るのである。切實にこれを言へば、人は誰れでも、道德や宗教の中に生活して居るのであつて、道德や宗教を、他所へ捜しに往くといふやうな心持ちが、已に甚だ間違つて居る。宋の戴益の作だとして傳へられて居る詩に、

米の[●]高[●]い[●]位[●]何[●]だ

盡日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲
歸來適過梅花下 春在杖頭已十分

といふのがあるが、如何にもよくこの間の消息を傳へて居る。

「宗教は七日に一日の宗教にあらずして、七日の宗教である」といふ言葉もあるが、日曜日にだけ教會へ出かける、教會に出かけた時だけ、宗教が人間に必要なものだといふのではない。毎日毎夜、行住坐臥、時と處とを問はず、凡て人間命のあらむ限り、道徳と離れることも出来ず、宗教と別るゝことも出来ないのである。

して、その心持ちはと言へば、「平常心是道」で、他所行きの心ではない、平常の心のまゝが、宗教でもあり道徳でもある。「柳緑花紅」とよく人は言ふが、腹が減れば飯を食ひ、眠むくなれば眠る、悲しければ泣き、癢に觸れば怒り、可笑しければ笑ふ。道徳や宗教ほど手近いものはなく、容易いものはない。

手近くもあり、容易くもある。しかし、荀子も言つたやうに、「道通しと雖も、行

かざれば到らず」で、チャンと据はつて居ては、一步も進めない。進まなければ、退くか離れるかの二途の外はない。

進め諸君、「心頭を滅却すれば火も亦涼し」と言ふではないか、米の高い位がな
ンだ。(大正元年八月「ニコ〜」)

五、胴てツ腹の教育

「ぐずぐずして居ると、胴てツ腹へ孔あけて、熱湯を注ぎ込んでやるぞ。」

といふ時の胴てツ腹と、彼奴、なか〜胴てツ腹のしツかりした奴だ。」

といふ時の胴てツ腹とは、言葉は同じだが、その意義は頗る違つて居る。

胴てツ腹、こゝに翻譯して腹といふ。腹とは、生理學や病理學や解剖

學の方では、どういふ風に取り扱つて居るか知らないが、吾々素人の考て

は、まづ胃と腸とがその主要部だときめて居る。胃と腸とは、人身の營養機關であつて、實に、人間活動の策源地である。

既に營養機關である以上、思ふ存分食つて、思ふ存分消化して、十二分の營養を吸収するのが、當然の任務でなければならぬ。然るに、古來、腹八合に醫者知らずだの、腹八合に病なしだのと言つて、頻りに、少食の利を説き、甚だしきは、腹の皮が張れば目の皮がたるむだの、馬鹿の三杯汁だのと言つて、盛に、大食を罵倒して居る。随分ケチ臭い申條であつて、頗るその意を得ないことである。恐らくはこれ、米の直段の高い時か、饑饉年にでも生れた、亡者の寢言ではあるまいか。

勿論、腹の雷、雪隠で夕立しなど、いふやうになつては、もうおしまひ

だが、自分の胃の腑で消化し得て、自分の腸で吸収し得る最大限を食し、更に進んで、胃腸を強健にして、ますます多く食ひ、いよゝゝ多く營養を吸収して、以て活潑々地に働き廻はること、誠に人生の快事ではないか。この孔をあけて、熱湯を注ぎ込まれる方の、肉體的胴てッ腹に對して、精神的の胴てッ腹がある。「君と僕と腹を合せてかゝれば」とか、彼れなかゝゝ腹が大きい」とか、惜しいかな、まだ腹が出来て居ない」とかいふ時の腹は、胃でもなければ、腸でもない。

「無暗に腹を肥して居る」とか、腹黒い男だ」とか、腹に一物」とか、腹きたなし」とかいふのも、肉體的の腹では説明がつかない。「腹を探る」だの、腹を抉る」だのといふことは、肉體的の腹の方で、實地にやられては、それこそ

大變、まづ以て、よろしく「腹を締め」、「腹を据えてかゝる必要がある。

「腹藝」といふことがある、腹の上へ臼を載せて、餅をつくといふやうなそんな殺風景なことでもなし、又、盛りそばを、自分の身の丈程を食べるといふやうな、そんな色消しなことでもない。

胴てッ腹……肉體的にも精神的にも……の強健は、教育によつて成る。肉體的の胴てッ腹は、種々なる體育法で強健にすることが出来る。精神的の胴てッ腹は、學問の力と宗教の力とで、強健になる。一言にしてこれを盡せば、双方ともに修養功を積みさへすれば、強健になると疑ひなしである。

胃腸が人身の營養機關であるやうに、頭は人心の營養機關である。

肉體的の腹には、腹式呼吸もよい、按腹もよい。精神的の腹には、坐禪もよいし、この頃流行の靜坐法もよい、そして、肉體と精神と兩方面の腹を、同時に強健にする法は、白隱禪師の、夜船閑話に説き盡されて居る。

健全な精神は、健全な肉體に宿るとしたならば、泰山前に崩れて來ても、白刃頭上に閃めいても、びくともしないといふ、胴てッ腹の力は、多く食つて多く消化する、胴てッ腹から、生れて來ると見て、差支ない。

今の時のやうに、政治家と言はず、宗教家と言はず、實業家と言はず、教育家と言はず、軟骨腐腸の徒の多い時代に於ては、吾等は、自らその胴てッ腹を堅固にし、更に、他の胴てッ腹の教育をもしてやらなければならぬ。

『新修養』は即ちこの胴てツ腹の教育を施す機關である。(大正二年二月『新修養』)

▲男らしき行動

男の行動は「男の行動」にして、「男らしき行動」にあらず、若し女にして、雄々しき行動を爲すものあらば、それこそ、始めて眞に「男らしき行動」とは言ふべけれ。然るを、近頃女らしき男の多くなり行きて、「女らしき行動」を爲す男の比々皆然らざるはなく、眞の男は當分品切、眞の「男の行動」は暫時絶版の體たらしく、今にしてこれを再版し、これを翻刻するにあらざるよりんば、永へにまた、「男」といふものに接するの期なけむか。

『雄辯』が、壬子の年頭に於て、まづ「男らしき行動」の翻刻再版を企つるもの、洵に機宜に適したりと稱しつべし。これを古に見る、謂はゆる「男らしき行動」の何ぞしかく多かりしぞ。文天祥が、

正氣歌の中に擧げたる事蹟だけにて、一冊の書を成すに難からず。否、必ずしも、チャン／＼の古手なんぞを搜し廻はるを要せず、この吾が大和烏根に生ひ立ちて、雄々しかりける人々、そもいくそばくぞ、中にも、之を佛敎界に求めて、十指幾度か屈して、尙足らざるを見るなり。今は、特に、親鸞上人と日蓮上人とを擧ぐべし。

傳へ言ふ日蓮上人「龍口の法難」、白双頭上に閃いて、上人の命は、げにも風前の燈にも比ぶべし、しかも、上人この時に當りて、徐ろに妙法を説き、且つ曰はく、「この醜き頭を以て、かの尊き法華經に代ることを得ば幸なり。」

と。法華の行者、日蓮上人は、死を以て、妙法の宣傳を試みんとはせるなり。この「男らしき」否「神らしく」。「佛らしき行動」は、爾來幾星霜、圓扇太鼓の音、ます／＼、冴え、ミヨウ、ホーレンゲイキヨウの聲、いよ／＼、高きを致せるにはあらざるなきか。更に聞く、親鸞上人、その師、法然上人と共に、罪科に處せられ、遠く北越の邊陲に流さるゝや、天を怨まず人を呪はず、却つてこれを以て、天さかる鄙の人々に

男らしき行動

も、他力往生の本願を傳ふべき、好機會を與へられたるものとなし、
 「大師聖人(法然)モシ流刑ニ處セラレタマハズバ、我又配所ニオモムカンヤ。モ
 シ我配所ニオモムカズンバ、何ニヨリテカ邊鄙ノ群類ヲ化セン、是ナホ師教
 ノ恩致ナリ。」

と歡喜す。嗚呼、何等「男らしき行動」ぞや、否、何等「神らしき」。「佛らしき」行動ぞや、東
 西の兩本願寺は言ふも更なり、その他の眞宗各派、皆悉く末廣に繁昌し、稱名の
 聲、在所聞かざるなきもの、洵に所以ある哉。
 苟も一片世を救ひ人を培はむの意あるもの、この意氣とこの實力とを有せ
 ざるべからず。世に勇氣あるもの少しとせざれども、仁これに伴はず、智これに
 伴はず、彼等の勇は、多くはこれ、暴虎馮河の勇のみ。今これを吾が日蓮上人に見、
 親鸞上人に見る、生死岸頭に立ちて、尙平然、尋常茶飯の事を爲すが如きもの、實
 にその根底に於て、堅實抜くべからず、熱烈燃えむとする、宗教的、信仰の存する
 あるがためならずんばあらず。

こゝに於てか知る「男らしき行動」否、眞の「男の行動」即ち「英雄的行動」は、宗教的
 信仰あるものにして、始めてこれを能くすべきものなることを。然らば、現代の
 如く、女性的男子の横行せる時に際しては、眞の宗教を宣傳し、新しき信仰を鼓
 吹して、依つて以て、人間靈性の根柢に培ふことの、頗る切要なるを認めずむば
 あらざるなり。(雄辯)

▲釋迦牟尼世尊

「忘れねばこそ思ひ出さず」とは、ナト理窟に過ぎる。僕等には、全く忘れる日の
 あらう筈のないのは、僕等の信奉する佛教の教祖、釋迦牟尼世尊であるが、さて
 忘れる日の無い中にも、四月になれば、又特別に、懐かしく慕はしく、今更らしく
 思ひ出されるのである。

人も知る如く、世尊は、淨飯王の御子と生れ、當然、國王の尊貴に位し給ふべき
 お方であつたのが、四門出遊の結果は、今の謂はゆる人生問題解決の煩悶とな
 り、まづ自ら救ひ、延いて人を救はむとの大願望を起して、王國の富も、國王の貴

も、全くこの願望のための犠牲として、遂に能く、正覺を成じ、爾來三千年、世界の

人、その遺教によつて救はれたるもの億兆なるを知らない。

自ら救はむがためには、利と名とを犠牲とし、人を救はむがためには、自らの身と心とを犠牲とす。古今東西を通じて、此くの如き偉大なる犠牲的人物が、またとあらうか。

春風胎蕩、櫻花爛漫の四月は、實に、この大偉人の降誕ましませし時である。
〔實業之世界〕

六、明治ツ子の舞臺

僕等が幼少の時代には、時の青年輩が、老人を目して、『天保時代の者に何がわかるものか。』と叫びしことを聞きしものなり。即ち是れ老衰せる『天保時代』の人と、新進氣鋭の『明治ツ子』とは事毎に、その意見の相

容るゝこと能はざりしがためならずんばあらず、彼は保守的なり、此は急進的なり、然るに、當時幼年なりし、僕てさへ、今や三十八歳なり、當時の青年は、今や四十歳以上とはなれりしなり。等しく『明治ツ子』といふと雖も、必ずしも青年のみにはあらざるを悲しまずんばあらず。

在朝の政治家中、局長次官以上のものに、『明治ツ子』幾人ありや。在野政治家中、多少世に重ぜられつゝあるものにして、『明治ツ子』幾人ありや。これを實業界に見るも、これを宗教界に見るも、これを學界に見るも、現に相當の地位に立てるものにして、『明治ツ子』幾人を數へ得るとするか。これを帝國議會、下院四百の議員中に見るも、明治以前の舊人物實にその四分の三を占め、『明治ツ子』は、僅にその四分の一を超えざる

にあらずや。その『明治ッ子』といふも、多くはこれ明治初年の出生にかゝり、明治初年以後のもの、一人だもこれなしといふに至つては、國家の老化眞に痛歎に堪へざると共に、滔々たる天下の青年が、躍然として突進しこの老化せる現状を打破して、生氣潑瀾たる清新の社會を建造するの勇氣なきに、驚かざる能はざるなり。

機會は來れり、青年の躍進すべき好機會は來れり、眼前に迫れる總選舉、これ豈、青年諸君か一躍して、老來衰殘の現状を打破すべき、絶好の機會ならずや。

青年は將來に生き、希望に活く。老人は過去に生き、追憶に活く、將來に生きむとするものは、何事か爲すあらむとするものにして、過去に生

けるものは、曾て爲せるところを振り返り見るのみ。苟も國民を代表して、衆議院に入り、國政を處理せむとする代議士たるもの、孫を相手に、猿蟹合戦や、桃太郎の鬼征伐を語るの外に、能なきの徒のみにして可ならむや。彼等の髭は霜の如く白く、彼等の頭は電灯の如く輝く。髭の白きは忍ぶべし、その思想の白きを如何せん。頭の禿げたるは恕す可し、その精神の禿げたるを如何せん。洵にこれ、青年の取つて代るべき時ならずや。

老人は、身を思ひ家を思ふこと、國を思ひ民を思ふに勝れり。これを以て國政に參與すといふと雖も、常に自己を本位とし、我利を目的とす。砂糖を嘗め、鐵管を喫り、瓦斯を吸ひ、有らゆる醜、有らゆる陋、たゞこれを

醜とせず、陋とせざるが如きは、一にその利己の精神、熾盛なるがためなるのみ、青年に至つては、即ち然らず、一身の利害一家の休戚の如き、殆どこれを眼中に置かず、天下國家のためには、猛然として身命を惜しまず、正義を精神とし、奮闘を生命とす。此の如くにして、始めて、國政を託すべきなり。

こゝに至つて、僕は、夫の少年氣鋭の大政治家、ピットを思はざる能はず。少くとも、日本の衆議院は死屍にも等しき老朽の徒を、自働車や馬車や、綱ツびきにて送り込むところたらしめずして、燒芋を喫りながら、世界の氣勢を論ずる、元氣横溢の活青年が、下宿屋の二階から、薩摩下駄をゴロツカせて、駆け込むところたらしめざるべからず。

老後の思出に。議員にでもなつて見たいといふが如き徒輩は、假令萬一を僥倖して、員に備はりたりとするも、ただ空間の一部を塞けるといふにとゞまりて、四年間は、めてたく議員の下積みとなり、何處へ紛れ込んだか、容易くは見出し兼ねるといふ有様、そんなものが、何百人集りたればとて、何事をか爲し得むや。取つて代るべきは青年なり。

嗚呼、老人の國家、老人の社會を葬り去つて、青年の國家、青年の社會を建造し、依つて以て人類の發達と、その幸福とを持ち來さむこと、これ實に僕等青年の任ならずや。逝け、老人。起て、青年。天保錢の通用せざることゝなりしを、何時なりと思ふや。(明治四十五年三月「高田新聞」)

▲中等階級と軍隊教育

米が・高いといふ、イヤ貨幣が安いのだといふ、どつちにしても、結論は同じく貧民泣せである。一家五人暮しの労働者、一日に一圓の賃金を得るとしても、その六十銭は米代に取られて仕舞ふ、残つた四十銭で、米以外のすべての生活がどうして營めるか。

腹が減つて、體探の出来ない小學生が續出するといふ今日此頃、三越や白木屋では、毎月千圓の帯の二筋位は、賣れないことがないといふ。

富者と貧民とだけで、中等階級が亡びては、その國家の存立が危くはあるまいか。

政治を商賣と心得、政治で食べて居る政治屋が、朝野に充滿して居る間は、健全なる中等階級の現出は空望である。

腹を減らしても、外見を飾らうとする。アムこの奢侈の悪風を國民に教へたるは、抑々誰の罪ぞや。

十五六才の素丁稚が、二圓近い駒下駄を穿いたり、鍋すみを、なすりつけて居

てこそ然るべきおさんどんが、おしろいの選擇に浮身をやつし、一寸出るにも、それショールだ、それ蝙蝠だと、一かどの奥さんぶり、お嬢さんぶらむとする、誠に驚くに堪へて居る。而して仕事は成るべく樂で、給金は成るべく高くと申す。都會に於ける奢侈の風、近時、田舎を襲撃して、殆どその底止するところを知らざらむとす。而してこの奢侈の輸入者は、男に在りては兵隊上り、女に在りては女中上り。

女中の始めて田舎より東京に来るや、その湯に入る時間の短きこと、驚くべき程のものである。今出て往つたかと思ふうちに、もう歸つて来る。それが、二月三月と、見真似聞き真似で、シヤボンを持つやうになる、あかすりを持つやうになる、洗粉は、何が一番よろしいでせうか、などいふ質問を放つやうになる。而して一風呂浴びて歸る時間が、一時間以上、長い時は一時間半にも上ることがある。もう彼等は、質朴なる良民の娘ではない。

二年三年の後、郷里に歸るや、たと東京の皮相の文明を説くにこれ急にして、

毫も他を思ふの念がない。鍛錬持つて、肥まみれになつて居た、二三年前の健實な思慮もなく、強大なる意力もない。なんの馬鹿々々しい、此處ばかりに日が照つて居るでもない、今度は、父母の許しもないを、弱に抜け出して、都の奢侈に飽かむとする。而して彼等の將來は、たゞ墮落あるのみ。

彼等自身の墮落は、もとより憐むべしと雖も、しかも、彼等が一度その郷に歸りて、見せもし聞かせもしたりし奢侈の風潮は、村の若き女子供が、羨望の中心となり、遊んで居て美しい衣物が着たいの念を、強からしむること、更に憐むべく恐るべきを見る。

兵隊さんとなつて、都會生活の實際を目睹し、自らも亦都人の食ふを食ひ、都人の觀るを觀る、軍生活二年の後には、もう泥にまみれて、田の草を取り、畑の芋を掘るを歡ばず、何とかして、都會に出て、樂をして甘いものを食ふ道もがなと、老いたる父母を残して、向ふ見ずに飛び出す、中には聊か文字を知れるを鼻にかけて、小學の授業生たらむと欲し、村役場の筆生たらむとす。

血氣盛んの青年男女は、此くして多く、鐵を投げ鐵を捨て、甚しきは家を捨て親を捨て、都會に入る。老人と子供とのみを残せる田舎の村落は、何人か田園の荒蕪を防ぐとせむ。

地主は、小作人年々に減じて、田畑の始末に因る。しかも國稅年々に増加して、腹背に敵を受くるの感なき能はず。

僕の生れしは、ステーションのある所より、一里を隔てたる片田舎にして、七十戸を越えざる小村落である。しかも今や、四時いつでも、ビールあり、雜詰ありて、村の若い衆に歡迎せられつゝありといふ。地主は曰はく、「村の若い奴等が贅澤になつて困る、帽子を被つて、襟巻をして、そして巻煙草なんぞまでを吹かず、その上ならず、何ぞと言へば、ビールを抜くの、雜詰を切るのと、まるで狂の沙汰だ。」若い衆は曰はく、「地主のわからないにも呆れてしまふ、年貢米を増すより外に、何の藝もないのだから。」

ア、此くの如くにして、米はいよゝゝ高くなるなり。

東京の兵營などでは、出来ないかも知れないか、田舎の師團などでは、謂はゆる軍隊教育の時間を軽減して、百姓の俸には百姓のことを、大工の俸には大工のことを、毎週時間を定めて、課するやうにしては如何のものにや。軍隊生活の中に、彼等は、百姓のことを忘れ、除隊の後には、更にこれを嫌つて、遂に百姓をやめてしまふに至る。これ實に亡國の第一歩である。

兵士の或ものを、農作に従事せしめ、軍隊用ゐるところの米、菜の幾分かを收獲するといふことは、國家經濟の上からも、重要なことであるし、百姓の俸をして、百姓を嫌はしむるに至らしめざる方便ともなるなり。

百姓の俸を怠惰ならしめ、百姓の俸を贅澤ならしむる軍隊教育の現状は、識者の研究を値する好題目ならずや。

七、都會の青年と地方の青年

今の都會の青年、ナマ若い分際で、不心得千萬にも、紳士がり、文明がり、

高尚がり、穩和がる。首に絹の風呂敷なんぞを巻きつけて、泥マン、泥棒マンの略にして、此頃流行の鐘マン、本や雑誌、その他の物品の、カッパライを商賣にして居る奴は、大抵あれを着て居るので、僕がこれを、泥マンと命名したのである。を着流し、兩手を懐へ捻込み、ゾロリとした風體で、ヒョロ／＼然、ヌラ／＼乎として、歩く姿からして、癩に觸つてたまらない時には、横素ツ頬のヒン曲るほど、一ツ、グワーンと、ヒツ叩いてやらうかと思ふことがある。體の仕こなしが既にそれだ、その精神の取り留めなきこと、海鼠の化物か、海月の腐ツたのにも似て居やう。

今更らしく、青年とはなど、こゝで青年の講釋でもあるまいが、全體青年といふものは、向ふ見ず、亂暴であるべきものである。氣に向か

なければ、先輩にても何でも喰ッてかゝるし、面白くなければ、明日食ふのに困つても、月給を棒に振つて、辭表を叩きつける位、お茶の子と心得て居るべき筈のものである。

「それではいけない、先輩は無理をいふものだ、後輩は先輩に敬意を表して、そこを我慢しなければならぬ。マア、腹も立たうが、短氣は損氣、そんなに激しないで、一步退いて考へて見給へ、辭表などは、今出さなくとも、何日でも、出せる、マア、マア。」といふのは、これは老人の役目だ。

然るに、今の青年、青年自身の立場を全く忘れてしまつて、老人の立場に立ち入り、先輩に盲従せよ、短氣は損氣だ、頭の一ツ位擲られても、お金

になるなら辛抱しやう、義を見てせざるは勇なきなりとは昔のこと、今は、利を見てせざるを怯者といふ。君子は義に喩り、小人は利に喩るな、ンぞは、唐人の寢言だ、御當世は、變節賣操、勝手次第、一代の國士だ、名士だと、殆ど青年崇拜の中心のやうにさへ、思はれて居た人々でさへ、金のためには、主義も操節も投げ出して、コロリと寢返り打ったぢやないか。果して然らば、利に喩るが君子であつて、義なんぞ八釜しくいふのは、馬鹿で間拔て唐變木だと申す。などゝぬかしくさる奴輩多きに至つては、もうどうしても勘辨ならぬエ、サア、僕が相手だ。

意氣、これ實に青年の命である。意氣の銷沈したものは、青年ではない。利巧、これ青年の最も耻づべきところのものである。然るに、今の

青年、まだ中學通ひの肩上げさへ取れない子供が、教師の顔色を窺つて、暮夜窃にその門に、菓子箱を擔ぎ込むといふやうなことを覺えるに至つては、實に言語道斷である。三ツ子の心百まで、この根性は、大學あたりへ通ふやうになると、ますます大きくなつて、常に教授の宅に伺候して、そのお髯の塵を拂ふことにこれ力め、卒業後の身の振方を僥倖せむとするものが、年々多くなるといふ評判。菓子箱を歓迎する教師も不埒、髭の塵を拂はせて、よがツて居る教授も不埒、かくては、青年も老年と共に、同罪を以て論ずべきである。ア、自ら進脩することも出来ず、自ら運命を切り開くことをも得せず、一切萬事、他人の力に依るといふ、意氣地ない今の青年、彼等は寧ろ、老朽爲すなき廢人にも劣れるではないか。

青年の老化、青年の墮落は、獨り都會ばかりではない。近頃は、僕の故郷越後の片田舎……勿論、何々村の内、大字何々といふ所である。……にさへ、ビールもあれば、罐詰もあるといふ。今までは、簑と笠とて身を固めて居た村の若い衆が、帽子を被つたり、襟卷したり、チョイと三四人集るとすぐビールを抜いたり、罐詰を切つたりして、寶生だか觀世だか依體の知れない謠なんぞをうなるといふ。進んだと言へば實に進んだものだが、かくても尙醇朴にして堅實なる、田園の美風と稱するを得るか。僕は寧ろ、僕の生れた大字の諸君……否、全國各地方の青年諸君に向つて、酒をのまなければならぬなら、諸君が自家用料の濁酒も可なり、村の酒屋の酒も可なり、酒の肴は諸君自ら池で釣つた、鮎の膾妙な

らずや、諸君自ら川で捕つた、鱒のぐす、煮も亦妙ならずや。田には田螺あり、畠には大根あり、麥葱のずんぐり、巻きに、生味噌つけて、それで一杯やつても、尙且つ優に、陶然たることが出来るではないか。

既に陶然として酔ふ、こゝに於てか諸君は、諸君の祖先より傳へられたる俚謡を、聲張り上げて謡ひ出すこと、凡そ天下の快事、これに過ぎたるはあるまい。若しそれ、僕の故郷の青年諸君ならば、松前を歌ひ、松坂を謡つて、咽の自慢に花咲かすも、亦頗る愉快なことではないか。然るに、何を苦しんでか、甘くもないビールなどを飲み、眞正の味の無くなつて居る罐詰物などを食つて、味噌の腐りそうなヘッポコ謡曲をうなり、人をも苦しめ、自らも難義し、しかも自ら以て得たりとなすの必要

が、どこにあらう。

そんな眞似までして、紳士がり、文明がり、高尚がり、穩和がつて見た所で、諸君の値打が、どれ程高くなると思ふや、結局はたゞ、時と財とを失うて、田園の荒蕪を得るに過ぎない事となりはしなからうか。氣を附けッ！今年は大正二年である。（大正二年二月十日の夜、東京市民が、警官や

新聞記者のために、殺害せられたといふ號外を読み、變な氣分になつて書き了る。『新修養』

▲細民と中等階級

火事があつても、水害があつても、米が高くなつても、一番困るものは、細民ではなくて、寧ろ中等階級である、細民と銘打つてあれば萬一の時には、救助もして貰へるし、火事に逢つても、焼く物はなく、水が出ても流

細民と中等階級

すものはなく、體だけさへ逃げ出せば、あとは救助だ見舞だと、平常は見ること出来ないうらなものを貰つて、食べもし着もすることが出来る。縱令、まるく貫はなかつたとしたところが、もとくで、一向平氣なものである。慈善や救恤の手が行届くだけそれだけ、細民をして非常のことの起り來らむことを、糞はしめるやうになるではなからうか。

それを思ふと、吾々中等階級は、萬事自分で處理して行かなければならないだけに、非常の事件が起つて來ては、もうとてもやりきれなくなるのである。慈善も救恤も、吾々中等階級には及んで來ないばかりでなく、多くの場合、却つて、慈善をせよ救恤をせよとさへ、迫られるのである、その苦しさは、尋常一様ではない。一國元氣の中樞であるべき中等階級が、細民以上に苦しんで居る日本の現代は、決して樂觀すべきではない。否、この状態が、將來に持續するとすれば、日本は最早將來に望みの無い國であるかも知れない。上流と下流とだけの國家は、貴族と奴隸との國家である。驕慢なる上流社會と、怠惰なる下流社會とのみの國家は、滅亡すべき國家である。

健全なる中等階級の出現、これ國家の隆盛を思ふものゝ、忘るゝ能はざる問題ではないか。

第 參 磔 篇



一、乃木大將自殺論

(二)情至り理盡さず

乃木大將の至誠純忠は、天下萬人の敬慕するところであつて、その清廉高潔なる人格は、縦令未だ一代の儀表を以て許すべからずとするも、少くとも、軍人の龜鑑として、これを景仰するに足るものである。然るに、その傳記の最終の頁を、舊思想より流れ出てたる古き血を以て彩られたといふことは、實に、千載の恨事と言はねばならない。否、世の學者名士操觚者流が、高潮せる感情を煽り立て、盛にこの至誠純忠の好將軍の傳記の末尾を汚さむとしつゝあるを見ては、僕到底一言なく

して止むことが出来ない。

一言なき能はずと雖も、しかも、乃木大將の自刃を難じやうといふのではない、乃木大將の自刃に對する世論の、甚しく感情に走って、往々中正を失ひたゞさへ適從するところに迷って居る現代の青年をして、ます／＼理智に盲目ならしめむとするものあるを難じやうといふのである。否、敢て難ずるの必要はない、世人は世人の考を述べて居るのであらうから、僕は僕の考を無遠慮に述べるのである。

(二) 學者名士操觚者の態度

乃木大將の死が、時も時、形式も形式であつたので、上下の驚愕は尋常でなかつた。従つて、未だ、大將が果して何のために自刃したるかの理

由明白ならざるに、早くも既に、新聞記者や、謂はゆる學者名士と稱せらるゝ人々は、勝手に乃木大將の心事を忖度して、或は殉死なりとし、或は憤死なりとし、或は殉死以上に深き意義ありとし、或は倫理道德を超越したる絶大なる行爲なりとし、或は神なりとし(黒岩周六氏)、或は佛なりとす(前田慧雲氏)、僕は、日本の先覺者とか識者とかいふ人達が、苟も一世を指導しやうといふ考だにあつたならば、なぜ、こんなに上ツ走りのした議論を、急いで公にしなければならぬのだらうか、なぜ、單に哀しみを述ぶるにとゞめないものであらうか、といふことについて、甚だしく不快の念を禁じ難いのである。

乃木大將の死の報ぜらるゝと同時に、その遺書のありしことも、報ぜ

られて居る。その遺書も、二三日の後には、發表せらるゝといふことも、報ぜられて居る。遺書だに讀まば、乃木大將は、何故に自刃したかといふことは、明白になるべきであらう、少くとも、遺書を見ずして、勝手な想像をして居るよりは、比較的正確に近い自刃の理由を見出すことが出来るやう。然るを未だその遺書の發表されないにも拘らず、得手勝手な想像を逞しうして、何でも神様に祭り上げやうといふやうな、議論を發表するといふことは、どうしても、早計の難を免るゝ譯にはゆかない。……これからも、こんなことがあるかも知れないから、念のため一言して置く。

(三) 乃木大將自刃の動機

乃木大將の遺書の第一には、
自分此度御跡を慕ひ奉り、自殺候處、恐入候儀、其罪は不輕存候。然る處、明治十年役に於て、軍旗を失ひ、其後、死處を得度心掛候も、其機を得ず、皇恩の厚に浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立の時無餘日候折柄、此度の御大變、何共恐入候次第、茲に覺悟相定め候事に候。

とあつて、其自刃は、明治十年の役に、軍旗を失つて、軍人の面目が立たないから、死んで申譯をしやうと思つて居たが、適當の機會がなかつたので、今日まで生き延びて居た。然るに、明治天皇不豫の大變に遭ひ奉つて、この時を死に時と思ひ定め、年來の希望を達したといふのである。

然らば、乃木大將の死は、單純なる殉死ではない。軍旗を失つて、軍人の面目を潰した申譯の死を、明治天皇の御大葬の時に、決行したといふまでのことである。十年の役に死ぬのが、今日まで延びたといふのである。低級の武人として自殺するのが、機會がなかつたために、高級の武官として自殺するといふことになつたといふまで、その動機には、十年役の當時と、今日とに、何等の異變もない。イヤ、假りに數歩を譲つて、強ひてその動機の異變を求めやうとならば、世人の想像するが如き、三十七八年戰役に際し、旅順に於て、多くの人の子を殺したことが、如何にもその親達に氣の毒であるといふこと、同じ時に、その愛兒二人までをも亡ひたる悲しみと、世道人心の頹敗に向つて、一服の清涼劑を投

じて、之を警醒せむとするの志と、及び遺書と辭世ともほの見えて居るやうに、殊遇を蒙りし、明治天皇にお別れ申した歎きとを加へて、こゝに明治天皇の御跡を、慕ひまつることゝなつたと解すべきである。

若しかく解することを當然だとすれば、乃木大將の自刃は、

軍旗を失ひし責任の解除

旅順に戰歿せる壯丁の親達に對する謝罪

愛兒二人を亡ひたる悲觀厭世

一死以て世道人心の腐敗を救はむとすること

來世までも明治天皇の御側で御奉公申さむとする殉死

の五理由に歸着するのである。

(四) 自殺と責任の解除

武士の一分が立たぬと言つて、切腹するのが武士道だ、武士の面目を踏み潰されては、生きて居れぬと言つて、自殺するのが武士道だといふならば、武士道は、淺薄なものである。愚なものである。切腹したら、立たぬ一分が立つてあらうか、踏み潰された面目が、元の通りになるであらうか。軍旗を失つたといふことは、軍人としての一大耻辱であらう、不面目であらう。しかし、死んだからとて、その軍旗が取り返へせるでもなく、耻辱が雪げるでもなく、不面目が回復されるでもない。その當時已に死を決して、しかも死するに至らず、爾來日清の戦役に、日露の戦役に、大なる勳功を立てたる乃木大將は、十年の役に軍旗を失ひたる罪と、

不名譽とを償ひ得て、餘りあるてはないか。生きて居たればこそ、かゝる好果も得たるなれ、十年の役の當時、ハッと思つたその刹那、自殺して仕舞つては、本人それ自身の満足は或は得られたかも知れないが、國家の損失は長へに取り返しがつかない。

死と同時に、一切の責任が解除されると思ふのは、舊思想である。弱い思想である。「死んで申譯をする」といふのが、日本人の特性の一であるやうだが、品物を無くされた上に、その無くした人にまで死なれては、損失は二重になる。寧ろ死んだつもりになつて奮戦苦闘し、末長く國家にも人類にも盡すところあつてこそ、その罪を償ふものと言ふべきである。その責任を全うしたものと稱すべきである。

曾て酒匂常明氏の自殺せる時にも、某仲買商の自殺せる時にも、世人はその無責任を責むること甚だ嚴酷なるものがあつたにも拘らず、乃木大將が軍旗を失つたを申譯なしとしての自殺に對しては、一言、その無責任を難ぜむとするものゝ無いといふのは、一は乃木大將の人格高潔の賜ではあらうが、一は、世人が眞理は御大喪中でも休止しないといふことを忘れて居るためであらう。

(五)死者蘇らず

旅順で戦死した壯丁の親達に對して、濟まないといふ考が、乃木大將自刃の動機の一部をなして居るとするならば、僕は、乃木大將が、如何にも人情に厚くて、部下を愛する志の深いのに、感服せざるを得ない。

その情の深厚なものには感服するが、その情を發表する手段としての自殺といふ形式は、甚だ意義のないことであると思ふ。

親として、その兒の天壽を全うしないのを悦ぶものはあるまい、しかし、日本の臣民は、それ自身、又はその子孫が、國家一旦の緩急に際して、義を泰山の重きに置き、身を鴻毛の輕きに比することを、否む程の不心得ものはない筈である。三十七八年戦に當りて、乃木大將の部下に屬し、旅順の攻城戦に加はつて、戦死したる多くの壯丁も、一度び出陣の命に接したる時、既に生還を期しなかつたのである。その父母たるものも、亦兒の生還を豫期しては居ない筈である。苟も死を決して戦場に向ふ、討死したからとて、その上長官を怨むべき理由もなく、上長官から謝

罪して貰はうと思ふべき譯もない。

旅順の攻城戦が、比較的苦戦であつて、豫想の外に多数の壯丁を殺したといふのは、その上長官たる乃木大將、殊に情に脆い乃木大將、二人の愛兒の戦死を目前に見て、しみじみと兒を亡つた苦い經驗を味つた乃木大將としては、彼等壯丁の父母に對して、衷心より氣の毒とも思ひ、濟まないとも思はれたであらう。しかし、そのために、乃木大將が自刃せられたからと言つて、彼等壯丁の父母が、どれだけ満足するであらうか、無論死んだ壯丁が蘇生する譯でもない。

(六) 厭世悲觀

武人のならひとは言ひながら、親子三人、同じ戰場に出陣して、その愛

し兒が、一人ならず二人まで、敵彈に斃れるのを、眼の前で見た親の心は果してどんなであらう。僕のやうに涙脆いものは、たゞそれを思ひやつたゞけれども、もう人事ならず涙ぐまるゝのである。乃木大將が、杖とも柱とも頼みをかけて居た二兒に先立たれては、流石に武人の氣丈夫で、取り亂す程の不覺はなかつたには相違ないが、ただそれだけ、其心中の遣る瀬なさは、一通りでなかつたであらう。老先き短い身が取り残されて、何樂しみに、此世にながらへて居られやう。好き機會だにあらば、その跡を追ひたいとも、思ひつめられたこともあつたであらう。これ誠に、人情の至極であつて、僕は衷心より同情に堪へないのである。しかし、一度理智の眼を開いて、これを冷靜に觀察する時ンば、則ち斷乎

としてこれに同することが出来ないのである。何となれば、これ明に、現世の悲観である、厭世思想である、生に對する咒咀であるからである。今更、現世悲観の愚なるを説くにも及ぶまい、厭世思想の誤れるを辨ずるにも及ぶまい、生に對する咒咀の笑ふべきを論ずるにも及ぶまい。これ等は、悉くこれ舊思想の産物であつて、現代の社會には、惡しき影響こそあれ、決して善き感化あるべしとは思惟することが出来ない。二兒を亡うて悲しくば、二兒の爲すべかりし事業をも、身一つに引受けて、以て、いよくますます、人のため國のために、努力し奮闘すべきではないか。

(七)憂國慨世と死

或は言ふ、乃木大將、常に世道人心の頹敗を慨き、殊に華族社會の腐敗を痛憤しつゝありたれば、この度の自刃は、即ち一死以て世を警しめ、華族社會の覺醒を促したものであると。乃木大將自刃の動機中、果して此くの如きことが、含まれて居たかどうかは、疑問であつて、その遺書中には、全くこれを見出すとが出来ないのである。しかし、渡邊宮内大臣へ宛てたる遺書中には、宮中及華族の子弟の教育のことなど、精しく記され、世道人心を啓發し、國民の精神上に、裨益すること多大なりと思惟せらるゝ所、少からざる由にも言ひ傳へて居るし、又、乃木大將が平常の行動云爲より推測して、さることも、全然含まれ居らずとも、斷じ難い點もないてはなからう。

縦令、乃木大將の自刃の動機中に、時弊を慨き、人心を清くせむとの考が含まれて居たからと言つて、それが乃木大將自刃の動機の總體でないことは、言ふまでもない。又、縦令、それが自刃の動機の總體であつたとしても、果して能く、その目的が達せられるであらうか、その手段が正當であつたらうか、問題となるではないか。こゝに於て、僕は、例の動機論結果論に逢着して、ゆくりなくも、往年、ミユイアヘッド氏の倫理學說によつて、禍を醸したる、哲學館事件當時に於ける、學者名士操觚者等の議論を回想し、轉た今昔の感に堪へないのである。

乃木大將が、世道人心の腐敗を救はむがために、自刃したといふのが、眞實だとすれば、どうしても、僕は、生きて居て、世道人心のために盡すの

と、死んで世道人心に刺戟を與へるのと、どちらが功果が多いかといふことを、考察しないで居る譯にはゆかない。若し、眞に、世道人心の腐敗を慨き、これを救はむと欲するも、位地卑く、境遇利ならず、言はむと欲して言ふ能はず、言つて而して世に顧みられないといふやうな人ならば、兎も角、この兎も角は、死んでも仕方がないといふことまでは、含まれて居ない。乃木大將の如く、身は武勳赫々たる陸軍大將として、人格高潔至誠純忠を天下に識認せられたる伯爵華族として、第二の皇室の藩屏たるべき、華胄子弟の教育の全權を握れる學習院長として、言はむと欲するところ言ひ得ざるなく、言つて而して行はれざることなく、爲さむと欲して爲し得られざるなく、爲してその功を擧げ得ざるなく、否、寧ろ

世人は乃木大將の、大に言はむことを冀ひ、大に爲さむことを望みつゝ、あつたのである。大將の人格、大將の聲譽、大將の地位、大將の境遇、この上に立つて、敢然として言ひ、毅然として行ふ、鬼神恐れ、惡魔伏す、世道人心の腐敗墮落を救はむこと、これに勝れることがあらうか。

極めて手近き一例を引かしめよ、乃木大將薨去の後、未だ數日ならざるに、早くも既に、その遺書を改竄して、私利を營まむとするが如きものを出したてはないか。遺書の發表時間を、各新聞記者に公約して、しかもその時間以前に、窃に御用新聞にのみ、これを漏らしたるものがあるではないか。この勢を以てしたならば、今後如何なる偽作の遺書の、何邊よりか出て來らずとも限られない。今後の僕等は、この一代の儀表

と稱せられ、軍人の龜鑑と目せられ、神と崇め、佛と拜まれむとする乃木大將の遺書に對しては、一種の疑惑と警戒とを以て、これに接しなればならないことになるのである。乃木大將は、かゝる不埒なる奴輩を警醒せむがために、自刃したりとせむに、その功果の甚しく尠少なるを嘆せざるを得ないではないか。この一事、たま／＼以て、生きて道に盡すと、死して道に盡さむとするとの優劣を判じ得て、頗るその要領を示したものと云ふべきである。

乃木大將は、自ら老衰、餘命幾何もなしと言つて居られるが、縱令、明日死ぬ命でも、生きられるだけは生きて居るべきである。殊に、世道人心の腐敗を救はむと欲する意のある人ならば、最後の、一呼吸まで、生を守

つて、此道のために奮闘しなければならぬ責任があるのである。乃木大將程の人がまさかはその責任を忘れたのではあるまいが、結果から言へば、忘れたと同じことになるのを、僕は頗る残念に思ふのである。

更にも一ツ、異つた例話をなさしめよ。現代青年の師表として、景仰せられて居る○○○博士は、常に筆に口に、憂國慨世の至誠を吐露して、世道人心に偉大な感化を與へて居られる。混濁せる現代に於て、博士の論議は、實に一握の明礬である、これあるが爲に刺撃せられ、これあるがために覺醒せられ、これあるがために指導せらるゝこと、それ幾何ぞ。しかも、若し博士にして、一朝憂國慨世の極、憤死したりとせば如何、少なくとも、僕は、現代を刺撃し、警醒し、指導する師表を、失ふの損害を思は

ざるを得ない。従つて、博士が、生きて世に盡すとの、死して世に盡すに勝ること、萬々なるを思はざるを得ない。

博士憤死したりとせば、感激して、これに殉ぜむとする青年の出づること、これなきを保せざる程に、偉大の感激を與ふべしと想像される。しかし、そういふことは、寧ろ一時の病的發作に基くものであつて、乃木大將自刃の後、これに倣つて自刃し、若くは自刃せむとしたるものが二三にしてとどまらないのと同じことであつて、それによつて、直に「死の感化」を讚嘆する譯にはゆかないのである。

然り、憂國慨世の志強く深きもの程、己の生命の長からむことを努めなければならぬ。而してその長き生命のあらん限り、國のため、世の

ために、叫ばなければならぬ、働かなければならぬ。

(八) 殉死と未來思想

乃木大將が明治天皇の殊遇を蒙り、鴻恩に感激し、一死君恩に報せむとするの精神は、誠に國民の模範とすべきものである。しかし、殊遇を賜はりし先帝の崩御を歎く之餘り、これに殉じたりしとせば、その情誠に至れるものありて、これを美しい行と見ることが出来やうが、未だ理を盡さざるの一點は、到底批議なくして止むべき問題でない。

古から、親子は一世、主従は二世、夫婦は三世といふことを言つて居るが、これ明に舊思想であつて、僕等は與みしない。この主従は二世といふ舊思想は、常に人をして、現世の不満足を、來世に於て満足せむと欲す

るの念を起さしめるのである。先帝の殊遇に酬ひ奉らむと欲して、しかも既に先帝在まらず、如かず先帝の御跡を追ひ奉り、來世に於て、永久に君側に侍つて、忠勤を勵まうといふのは、確に誤れる未來思想に囚はれたるがためではあるまいか。

君恩に酬いること、必ずしも殉死の外に道がないのではない。否、商人が算盤持つて、商賣に力を注ぐのも、農夫が鋤鋤執つて、田畠を堀り返すのも、教員が教壇に立つて、子弟を教育するのも、軍人が銃劍を擔いて、戰場に馳せ向ふのも、悉く君恩に酬いるの道である。乃木大將、苟も君恩に酬いむとならば、學習院長としての任務を全うするもその道であるし、軍事參議官としての任務を果すもその道である、殊に、先帝に仕へ

まつるの心を以て、今上陛下に仕へまつるが如き、最もその宜しきを得たる道ではあるまいか。此くの如き諸種の道あるを捨て、たゞ一時の感情に制せられ、未來思想に囚へられて、死すべからざるに死したるは、少くとも國民の理想とすることは出來ない。況んや、殉死は國法既にこれを禁じて居る以上、乃木大將の如き、模範的人物が、國法を輕んずるの、先例を後世に遺したとしたならば、嚴にこれを責むべきではあるまいか。

果して然らば、先帝に誠忠なりし乃木大將も、今上陛下に對して不忠でないと言へやうか、明治の御世に親切なりし乃木大將は、大正の御世に不親切でないと言へやうか。

(九) 最負の引倒し

僕の、乃木大將の自刃を観ること、大略右の通りである。乃木大將の自刃を観察すること、斯くの如しと雖も、しかも、乃木大將の高潔清廉なる人格と、至誠純忠なる精神を景仰するの念、決して人後に落つるものではない。乃木大將の遺されたる功業と、感化とが、國家の天壤と共に窮りなきが如く、永へに光輝を放つべきものであることを、確信して居るものである。しかし、そのために、この千慮の一失とも言ふべき自刃、理を盡さざる自殺までをも、意義あることの如く辯護することは出來ない。否、滔々たる天下の學者名士操觚者の如く、徒に感情をそゝりたて、何でもこの自刃を以て、乃木大將の人格や功業や感化と混同して、

黨猶同列の論を逞しうし、乃木大將の殉死は、萎靡せし人心に絶大の痛棒を與へし警策なり、彼の死や燦然。」など、言つて、大に乃木大將を神化せむとして、却つてこれを愚化せむとするが如き、最負の引倒しの議論に賛同することが出來ないのである。

乃木大將は、乃木大將としてエラかつたのである。生きて居られた、乃木大將がエラかつたのである。自刃せられて、俄にエラクなられたのではない。然るに、自刃せられてから、俄にエラクなられたやうに言ふのは、寧ろ、乃木大將の生涯に對して、侮辱を加ふるものである。人生の意義は、死後にあるのではない、生前に在るのである。生は人間の總てである、この立場から言へば、自然の死は、眞に止むを得ないことであ

るが、故意の死、自殺は、確に罪惡である。人間としての罪惡は、陸軍大將たると、一兵卒たると、華族たると、素町人たるとに依つて輕重の差はない。然るに、世には、倫理とか道德とかいふ屁理窟を以て、凡人の死を論ずるやうな議論は、聴きたくない。乃木大將の死は、實に偉大なものであつて、論議を超越して居る。」とか、乃木大將の死したるが如き、高潔の死を、國民間に鼓吹せむと欲す。」とか、随分血迷つた議論を、平氣でやつて居る者がある。これ等の人々が、三週間も後になつて自分の議論を、冷靜に讀み返したら、果してどんな氣持がするか、聞きたいものだ。熱し易き國民は、冷め易き國民である、何事にも冷め易い國民を有する國家は、幸福な國家ではない。

或は曰はく、生も詩なり、死も詩なり、詩は往々にして議論を超越するものであると。これ一種の人生哲學であつて、この立場から、乃木大將の死を偉大とし、莊嚴として、これを讚嘆せむとするものあらば、僕は、その哲學の根本義に、批難を加ふべき餘地あるにもかゝらず、これを諒とせむ。日本空前の盛儀たる、先帝の御大葬に當り、靈輻將に門を出てまさむとする刹那、武勳赫々たる老將軍が、傳家の銘刀を揮つて、割腹して御跡を追ふ。實にこれ大なる詩である。但し、詩は必ずしも、合理的たるを要しない、又必ずしも人間行爲の標準を示し、善惡の判斷をするものではない。

(十)國民の理想

凡そ、教育の理想でも、道德の理想でも、宗教の理想でも、人間がこれを眞似得て、これを實行し得るものでなければならぬ。倫理道德を超越したる偉大の行爲といふが如きものは、人間の理想としては、餘りに大き過ぎて、役には立たない。神と言ひ佛といふ宗教上の理想でさへ、僕等はこれを、人間離れのしたものにはしたくないのである。楠公湊川の戦死は、忠烈無雙である、しかも、これを直に、今日の我々に強ひられるには困る。たゞ吾々は、楠公と同じ境遇に立ちたる場合、楠公に譲らざる、潔い死に方をするといふ覺悟をしてさへ居れば善いのである。否、楠公が湊川で戦死したといふ、その精神を眞似さへすればよいのであつて、必ずしも、その精神を、楠公と同一の形式で發表しなければならぬ

いといふことはない。楠公の精神と同一の精神を以て、俤を引いて居れば、これ忠烈なる俤夫であるし、楠公の精神と同一の精神を以て、豆腐を賣つて歩けば、これ亦忠勇なる豆腐屋である。「死ぬるが忠義といふことは、何時の世からのならはしぞや」といふことは、「先代萩」以来の疑問ではないか。

死は易く、生は難し。死にして國民の理想とするに足るものならば、たゞさへ難を捐て、易に就かむとする薄志弱行の現代人、誰かはこれを真似ないものがあらうや。生活難を叫びながらも、しかも尙、死に赴かず、營々役々として、悪戦苦闘しつゝあるところ、實にこれ人生の眞意義の存ずるところである。今、乃木大將の自刃を以て、一代の模範なる

が如く、國民の理想なるが如く言ふは、死者に對する敬意と、死者その人の徳望に對する景仰とに基くとは言へ、苟も世を導き、人を教へむとする、學者名士操觚者等の、無條件に口に筆にすべきことではない。従つて、又、縦令、學者名士操觚者が、如何に迂説曲論すとも、世人は、これに迎合し雷同して、理想とすべからざるものを理想とするには當らないのである。たゞ、僕は、乃木將軍の如き、高潔清廉の人格と、至誠純忠の精神とを理想とし、これを真似んことを冀ふの情、天下萬人と共に、甚だ痛切ではあるが、その自刃といふの一事は、斷々乎としてこれを排斥し、批難せざるを得ないのである。否、乃木大將を批難するものではないか、る明白の事理をも、己の感情のまに／＼、若くは俗論本位の立場から曲

解し、阿世迎合的所見を發表して、しかも、身、世間指導の任にあるを思はない。謂はゆる學者名士操觚者の態度を批難せざるを得ないのである。否、學者名士操觚者、各その見るところを忌憚なく發表せられたるものであらうから、僕はこれを批難するといふよりは、寧ろ、これに敬意を表し、僕は、僕の觀るところを無遠慮に述べ立て、遺憾ながら、學者名士操觚者等と、結論を同じうせざることを明にするのである。

要するに、乃木大將の自刃は、その情に於ては誠情に於ては誠にこれを諒とすべきものではあるし、又乃木大將自身としては、最善最良のとを爲したといふ、大満足大満足を以て死なれたであらうし、更に又、その死は市井の痴男治郎の自殺などに比すべきものでなくて、この死によりて、多大の感動を國

民に與へたでもあらうが、即ち乃木大將の自刃は、實に偉大なる死ではあらうが、たゞ一點、理に於ては未だ甚だ盡さざるものがあるといふことを言ひたいのである、こゝに恭しく、この清廉高潔、至誠純忠の老將軍、乃木大將の薨去を悼み奉る。(大正元年九月十八日、乃木大將葬儀執行の日記す。『新佛敎』)

▲乃木大將の自刃

人も人、時も時、先帝の御大葬で、萬人の感情、最高潮に達して居る時、人格高潔、至誠純忠の人、乃木大將の自刃は、少からず萬人を感激せしめたであらう。たゞ、感激の餘り、理智の眼までを曇らせてはいけない。乃木大將の自刃は全く、大將自身の至誠の發露であつて、大將自身の満足は、僕等の想像以上であらうと思ふ。街はむがためでもなく、場當りをやつたので

もなく、偽善的行爲でもない。一點私心を交へざる、公明な心事であることは、言ふまでもない。従つて谷本博士のやうに、死屍を鞭つやうな批評を下すのは、穩かでないが、さりとして、至誠發表の手段としての、自刃といふ形式までを、乃木大將の精神と同様に見做して、これを讚嘆するのも穩かでない。

▲乃木大將と侍従長

先帝崩御、今上天皇踐祚あらせらるゝと共に、僕は、心竊に、乃木大將こそ、侍従長として、最も適任であらうと思つた。然るに、意外も意外、桂大將がこの重任を負ふことゝなつたので、一度は憤慨もし、一度は失望もした。

今更言つても仕方はあるまいが、若しあの當時、乃木大將をして、内大臣兼侍従長たらしめたならば、必ず、大將は、自刃といふやうな、理を盡さないことをしないで、衷心より歡喜して、今上陛下に、忠節を勵み、天壽を全うすることを得たらうと、今でもしみじみ思ふのである。

▲乃木大將の遺志

乃木大將は、一代華族論の實行者である。もとのこの一代華族論といふことは、板垣伯の創唱にかゝるものであつて、又、僕等の宿論である。然るに、乃木大將は、縱令、後嗣が亡くなつたゝめとは言へ、潔くこれを實行したといふことは、誠にその心事の高潔さは、見上げたものである。自刃の如きを驚嘆せむよりは、寧ろ着々として、この一代華族論の實行者を出さむこと、實に乃木大將の志を爲すものといふべきである。山縣公にせよ、桂公にせよ、是非これだけは、眞似て欲しいものである。

▲乃木大將の眞似

藤村操が、華嚴の瀧壺に飛び込んだ當時これを眞似た馬鹿もの、二三にしてとゞまらなかつたが、乃木大將自刃の報傳はるや、またぞろ、これを眞似るもの、頻りに出てむとする模様がある。自刃は、乃木大將の千慮の一失であつて、縱令

乃木大將の遺志

それが、社会人心に、どんな感動を與へたと稱せらるゝにせよ、確に乃木大將のやり損ひである。乃木大將の尊いところは、そんなやり損ひの點にあるのではない、失錯にあるのではない、平常の心掛けにあるのである。人格にあるのである。彼を取らずして、此を取るは、恰も、色魔が、英雄を氣取るの愚に似て居るではないか。笑ふべしとは、こういふことを言ふのである。

▲死んで善い人

凡そ世に、死んで善い人といふ人はなからう。しかし、僕一人の希望を言へば、死んで貰つた方が、世のため、人のためだと思はれる人も、三人や四人はある。ところが、そういふ人に限つて、なか／＼死にそうにもないし、死ねそうにもない。乃木大將の如きは、死んで悪い人である。生き居ねばならない人である。又生きて居て貰ひたかつた人である。この生きて居て貰ひたい人が死んだといふのに、世間の人々が、喜び勇んで、神だ佛だと囃し立てる、それが僕には、一段と癪に觸るのである。

山縣公尙健在なり、桂公尙健在なり、大正の日本は、天下太平である。

▲遺書の改竄

乃木大將の遺書といふもの、改竄して發表せらる。こんな様子では、偽造の遺書が出やうも知れない。乃木大將の自刃は、大將自身として眞剣である。芝居でもなければ、嘘でもない。改竄することも出来なければ、偽造することも出来ないのである。

乃木大將は、自刃といふ不合理なことさへ、公々然と行つて、決してこれを隠さうとはしなかつた程に、公明な心事の人であつたのである。これが遺族や友人たるもの、その遺書に手なんぞ入れては、全く、大將の志を、誤るものと言はねばならない。

さるにても、僕等は、今日以後の發表にかゝる乃木大將の遺書といふものを、割引なしに信ずることの、甚だ危険なるを思はざるを得ない。川柳子曰はく、泣いた眼の俄に光る片身分け。

▲乃木夫人の殉死

乃木大將の自刃は、全然先帝に殉死した者と解すべからずとするも、乃木夫人が、乃木大將に殉死したものであるといふことは、一點の疑を挟む餘地がない。

乃木夫人の貞潔は、今更言ふまでのことではない。たゞ世人は、夫人が殉死したるがために、非常に貞潔の度を加へたやうに言ふのは誤りである。古人の詩に、

征夫語征婦。死生不可知。欲慰泉下魂。但視襟中兒。

といふのがあるが、乃木夫人は、その愛兒二人、共にこれを亡つて、謂はゆる襟中兒がないのである。曩には愛兒に別れ、今また眼前、その夫の死を觀る、如何に氣丈なる婦人でも、この時この際、人生をはかなまずに居られやうか。乃木夫人の自殺の、同情に堪へざること、寧ろ乃木大將の自刃の、同情に堪へざることにも増して居る。

しかし同情に堪へざるがためにといふ理由の下に、その執れる手段の誤れるをも、寛假することは出来ない。

▲世界の日本

日本の日本であつた舊日本には、舊武士道は花であつた。今や、日本も、世界の日本たる新日本となつたのに、何時までも、舊武士道を珍重するにも及ぶまい。廣瀬旭窓の詩に、

香烟爐上起。片々帶奇薰。及其窓外出。不復異凡雲。

日本の内だけならば、兎も角、今は、日本の外へ出なければならぬ時である。

▲乃木大將の死と世評

乃木大將の自刃に關する世論中、僕等と、その觀るところを同じうするものたゞ僅に、加藤弘之先生と浮田和民氏との二人あるのみ。僕が平素景仰して居る、恩師三宅雪嶺先生までが、全く滔々たる世論と同論なるを見ては、僕たるも

の、實に、遺憾に堪へないのである。又、常にその識見に服して居る黒岩周六氏が、乃木大將の自刃を以て、楠公の死以上なりとして、極力これを嘆美せられたのを讀んで、僕は頗る失望したのである。

三教會合事件當時には、事毎に僕等と反對の愚論を書いて居た『基督教世界』が、乃木大將の自刃に關しては、全然僕等と同意見で、敢然として、

吾人は、乃木將軍の如き、偉人が、今少しく精神化せられたる忠君愛國思想を、其身に實現して、以て、新武士道の曙光を輝かすことが出来ず、消え行く残月の光の如く、古き武士道の犠牲となり終りたるを惜むの情に堪へぬのである。

乃木大將の自殺の如きは、日本特有の道徳としての、武士道の最後の者であらう。過去の日本は、此種の武士道を以て、或は足れりとした、而かも、將來の日本は、斯る偏狭固陋なる舊式の武士道により、外は以て、世界に立つ能はざるのみならず、内は以て、新しき時代の民心を指導する能はざるは明白である。

と言ひ放つたのは、如何にも雄々しく思はれた。

▲乃木大將の英靈と白鳥

靈輦御發引、將に二重橋を出てまさむとする時、綿の如き一羽の白鳥ひらひらと闇夜の空より舞ひ下り、御行手の途を、幾度か翔り居りしが、やがて其儘消え失せた。然るに、翌日桃山の御陵所でも、同じ鳥が、如法暗夜の天空遙かに舞ひ下り、御陵の空を、幾度か去りがてに翔りめぐりて、又しても、消え去つたと言つて、直にこれを、乃木大將の、化して白鳥の姿となり、大御魂の御行方を、前行せられたものだらうと語つた宮内大官があると、『中央新聞』が書いて居る。段々話が面白くなつて来るが、御一同、眉に唾をつけることを忘れないやうに。(九月廿日夜)

二、曲學阿世の徒を製造する國

僕常に、曲學阿世の徒を敵とし、これを剿絶せむことを以て天職となし、十年一日の如くこれを捨てざりき。しかも最近、乃木大將自刃のこゝとありてより以來、僕等は、こゝに、曲學阿世の徒を批難することの、頗る誤れることを發見したり。

世舉げて濁れり、吾獨り清めりといふ、滔々たるこの濁れるもの、この孤獨なる清めるものを包圍して、或は威嚇し、或は迫害す、剛健の意志と熾烈の信仰とを有するものにあらずむば、曷ぞ能く、ガリレオの如くなるを得むや。

ガリレオの地動説、今や三歳の兒童もこれを知らざるなし。しかも彼が當時の社會は、彼を殺してまでも、彼をしてその説を放棄せしめん

としたりしなり。世舉げてこれを非なりとする時、吾れ獨りこれを是なりと云ふことの、必ずしも妄ならざること、この一事に於ても、これを證し得べきにあらずや。

眞理は、王侯を以てするも、之を改訂すると能はず。一國一郷の多數決にのみよりて、之を定むること能はざるなり。輿論に聽くの寛容は尊ぶべし、輿論に誤らるゝとあるを知らざるは愚なり、乃木大將の自刃するや、大將の人格高潔にして至誠純忠の人たりしが、ための故に、世人は、擧ぐ、其至誠發表の手段として執りし自殺といふ形式までをも讚嘆措かざりしなり。偶々一二、この手段この形式を非とするものあらむか、或は之を無血性兒と譏り、非國民と罵り、小人他の美を爲すを好まず

と嘲り、或は鐵拳を加ふべしと言ひ、或は天誅を下すべしと言ふ。甚だしきは、その家に石を投じ、その職を奪はんとするに至る。此くても尙言論の自由を尊重すと言ふか、眞理を愛するの情深しと言ふか。

谷本博士が、乃木大將の人格を批難したるが如きは、その何の意たるやを解する能はずと雖も、少くとも、乃木大將の平常を知らざるの愚説といふべく、又死者に對する敬意、人類相互の最終の禮儀を辨へざる無知を笑ふべし。之に反し、夫の加藤弘之博士の如き、浮田和民博士の如き、若くは、吾徒、境野黄洋君の如き、眞に國を憂ひ、社會の風教を思ふの至情より、堂々としてその所見を公にしたる者に對し、異なる立場に立ちて、正面よりこれを論難せむとはせず、徒らに之を非國民とし、人非人と

し、脅迫状を送つてその口を嵌せむとす、蓋しこれ、學者をして、その理を盡さしめんとする、眞理に忠なる態度にあらずして、實に世の學者をして、曲學阿世にあらずむば、命を保つ能はざらしめむことを思はしむるの態度なり。硬骨の學者をして、悉く、その主張と其見識とを擲たしめ、曲學阿世の軍門に降參せしめむとするものなり。曲學阿世の徒にあらずむば、現代に處すること能はざるを教ふるものなり。

嗚呼、僕今にして、世の曲學阿世の徒と戦ひ來りしことの、彼等に對して、甚だ氣の毒なるを思はざる能はず。冀はくは諸君、幸ひに安んぜよ、僕今後、また再び諸君を難することをなさざるべし、諸君は、須らく、輿論の寵兒として、新聞の愛子として、肩を聳かし腕を振つて、揚々として、天

下を横行濶歩せよ。

たゞそれ諸君を難ぜず諸君を難ぜずと雖も、しかも、僕自身また諸君と共に、曲學阿世たる能はざるなり。何となれば、僕には、曲げるだけの學もなく、僕に阿ねられたればとて、世はさ程に歡ばざるべければなり。

(大正元年九月廿五日の『東京朝日新聞』)

▲左丘明會

新海竹太郎君、今秋の文部省展覽會へ、左丘明の像(木彫)を出品して、天下を驚す。

平子鐸嶺君の世に在りし時、新海君と約して左丘明の像を作り、左丘明會を催さうといふことを計畫したのだが、その志を達するに至らずして病歿したのである。新海君の、左丘明像は、實にこの、鐸嶺君の遺志を成したものと云ふべ

きである。そこで、今夜(十月廿日)本郷湯島の某亭に於て、新海君の發議で、左丘明會を催し、中川忠順、稻葉君山の諸君、及、僕も參會することになつて居る。

『論語』に出て居る左丘明が、『左傳』や『國語』の著者と、同一人であるかないかは別問題として、兎も角、左丘明はエライ人物である。鐸嶺君が、特に左丘明會を催さうといふ考を起したのはどういふ動機であつたか、今はわからないが、恐らく、『論語』の、

子曰、巧言令色足恭、左丘明耻之、丘亦耻之、匿怨而友其人、左丘明耻之、丘亦耻之。とある、その左丘明の耻づるところが、鐸嶺君の耻づるところであつて、意氣自ら投合したといふ點にあるのであらうと、想像される。

鐸嶺君の蛇蝎の如く嫌つたのは、實に巧言令色足恭の徒である、この種の徒輩と相會するや必ず、鐵槌一下、グワーンと參るのが例であつた。又、匿怨而友其人といふやうな、融通無礙の藝當は、鐸嶺君の爲し得なかつたところであつた。この點から言へば、鐸嶺君は、實に、左丘明が振出して、孔子が裏書きした手形の、

使用者でアツたのである。

鐸嶺君と同じく、この手形の使用者は、鐸嶺君の友人中には、少くはない。新海君もその一人である。中川君もその一人である。稻葉君もその一人である。憚りながら、かく申す僕も、大にその一人である。

現代の社會に立つて、人並みの顔をして行かうといふには、巧言令色、足恭、皆是れ、缺くべからざる武器と稱されて居る。従つて、この種の徒輩の横行、實に癩に觸つてたまらない。この間に立つて、たま／＼僕等、左丘明主義の實行者の苦闘は、一通りでない。匿怨而友其人といふことも、現代處世術の秘奥と解されて居る。従つて、現代人の多くは、無主義、無節操、無定見、無理想、輕浮、殆ど娼婦の如きものである。この間に立つて、たま／＼僕等、左丘明主義の實行者の惡戰は、尋常でない。

左丘明の耻づるところは、孔子の耻づるところである。孔子の耻づるところは、亡友鐸嶺君の耻づるところである。鐸嶺君の耻づるところは、君の遺友、中川新海、稻葉等の諸君と、僕との耻づるところである。冀くは、ます／＼この左丘明主義の發揮に努めたい。

三、良民にして暴行なり

諒闇中とあつて、心ある人は、遊獵をさへ非となし、これを行ふものを誠めても居るし、又、大祭祝日にさへ、參賀も賀表捧呈も、共に御遠慮申上げて居るといふ程に、萬事謹慎の意を表することに、専らであるべき時に際して、帝都の中央、殊には、宮城間近の日比谷原頭に於て、警官が國民を馬蹄にかけたり、劔を抜いてこれに斬りつけたりしたるさへ、言語道斷の不謹慎であつて、その罪決して輕からざるものがある。しかも、そ

良民にして暴行なり

れが十日よりして、紀元節なる十一日にかけての出来事だといふに至つては、事の偶然に發したりとするも、尙且つ、當局の責任、頗る重大である。況や、事のこゝに至りし筋道をたどつて見ると、當局の措置、妥當を缺けるがためなること明白にして、一點のこれを辯護する餘地がないてはないか。

チヨロ／＼と、溪間を流れて居る細流でも、これを堰けば、池を爲すこと容易である。既に池となる、その堤を崩せば、氾濫の勢、樹を倒し、家を流すの大事が出来、るかも知れない。十日の議會を傍聴せんとして、議院に集まつた人々は、實にこの木の葉の下をくゞつて居る、岩間の清水の如きものであつたのである。それを、何故か、警官これを堰ぎ止めて

流れの自由を抑へたゝめに、忽ち日比谷原頭に、一大湖水を現出し、人波荒くして、遂に警官を以て作られた堤防を破壊し、濁水滔々として、全市を浸すの大慘劇を演じたのではないか。

想ひ起すは、社會主義者に對する取締りである。彼等もと、忠良の臣民であつたのを、經濟上の新主義と非戰主義とを唱道したといふので、無暗にこれを壓迫して、その口からパンを奪ひ、その體から被服を剝いで、彼等をして、全く生きてゆかれないやうにしてしまつた。彼等たるもの、もうこうなつては、破れかぶれだと、ます／＼自暴自棄の態度に出づるやうになつて、遂に、その同志十數名が、絞首臺上の露と消えるといふことゝなつたのである。今更言つても仕方がないが、若しあの當時

の當局者が、彼等を待つこと寛大に彼等に接するに温情を以てしたならば、恐らくは日本に於ける社會主義は、極めて穩健に、極めて國家的に發達して、美しい社會改良機關となつたかも知れないと思ふのである。現に前西園寺内閣成立以來、彼等社會主義者に對する態度の、幾何か寛大になり、その職業を妨げるといふやうな、理不盡な蠻行をしなくなつたので、彼等も、敢て強ひて政府に反抗しやうとするやうな態度を執らなくなつたてはないか。近くは『國民新聞』や、『やまと新聞』が、憲政擁護の演說會を社會主義の會合であるなど、二號活字で書き立て、居るやうに、嘘にも、社會主義者が、憲政擁護など、いふ國家的運動をして居ると、政府側から認められる程、穩和なものになつて居るではないか。

否、政府側の新聞から、社會主義者が、憲政擁護のために、大に働いて居るやうに言觸らされて、何かやらぬかと言はぬばかりの煽動的記事を掲げられて居るにも拘らず、今の社會主義者は、一向何等の運動をもしないで、忠實に、且つ勤勉に、各々その自分の従事して居る職業に、熱中して居るではないか。こゝにいふ點から考へて見ると、人を豺狼にするのも、人を人間にするのも、一に當局のこれに接する態度如何にありと言つて差支がない。

惟ふに、桂公爵が、それ自身の分際を忘れて、常侍補弼の大任を拜したといふことが、抑々國民の桂公に對する公憤の發端であつて、更に桂公が、黒幕となつて、二個師團増設問題といふ毒藥を投じて、多數黨の組織

した政友會内閣を殺害したといふので、國民の公憤一層その度を高め、ついで桂公自ら宮中を出て、内閣を組織し、屢々聖勅を煩はしたるさへあるに、海軍大臣を留任せしむるにまで、聖上を煩はし奉り、理由なくして、三度まで議會の停會を爲し、國民の公憤ますます高潮して、時局頗る己に利ならずと見るや西園寺侯をベテンにかけて、遂に優詔一下、西園寺侯をして、時局紛糾解決の責任を負はざるべからざらしめ、遂に西園寺侯をして、全く政治的自殺を餘義なくせしめたる、その老獪惡辣の心事、その非立憲的手段、國民は最早、到底これを袖手傍觀すべからずとして、眞に、憲政を擁護せむがために、十日の議會に押かけたのである。この時に當つて、當局のもの、聊かもこれを堰き止めむとせず、毫もこ

れに抑壓を加へなかつたならば、死傷者を出すやうな不祥事は、斷じて起らなかつたであらうし、又、新聞社破壊、交番焼打といふやうなことも、出來ずに仕舞つたであらうが、當局まづ、第一着手を誤つて、時も時、所も所、かゝる大不祥事を突發せしめたのは、眞に遺憾千萬と言はねばならぬ。

謂はゆる第一着手とは何ぞや、桂内閣が、川上といふ人を警視總監に任命した事即ちこれである。川上總監は、曾て明治三十九年の頃、警視廳の部長であつた時、部下の警官に劍を抜かせて、良民を斬らしめたことのある、この道に於ける一種の前科者である。而して、來任に先ち、京都に於て、今度は、大に蠻行をやると公言した人で、従つてその未だ着任

せざる以前より、東京市民は、早くもその不信任を訴へ、東京府會の如きは、ために警察機密費二萬圓の大削減をしまつた程である。こゝにいふやうに、最初から市民を敵として、これに臨んだ警視總監、到底市民の生命財産を保護して、これを安んぜしめて呉れやうとは思へない、これに信賴して、枕を高くして安眠する譯にはゆかないと、何人も思つて居るところへ、憲政擁護のために東奔西走して居る忠良の國民に對し、盛に壓迫を加へたばかりでなく、用もないのに、多數の警官を繰出して、國民の行動を妨げ、剩へ騎馬巡查なんぞまで出して、國民を馬蹄に蹂躪し、遂には劍を抜いてこれを斬つたといふに至つて、國民の公憤は一變して、熱狂となつてしまつた。

ア、熱狂！人間氣が狂へば、何をするかわからない。たゞ僕等は、氣が狂つたものを、暴民だの兇徒だの言つて責めることの、甚だしく無慈悲なるを思はざるを得ない。氣の狂つたものゝしたことを、暴行だの暴動だの言つて、これを罵り去るにも忍びない。寧ろ國民をして、狂せざるを得ざらしめ、暴行せざるを得ざらしめた當局の、誤つた第一着手を、怨めしく思ふのである。

狂すべく餘義なくせられたとは言へ、新聞社を破壊し、交番を焼打し、電車の運轉を妨げるといふが如きは、確に暴行である。かゝる暴行を敢てしたものを、これを暴徒と呼ぶに、理に於て聊かも異存がない。たゞ僕は、社會的制裁といふものゝ、峻嚴ならざるべからざるを思ふと共に、

私刑の存在を必要とするものである。曾て『體罰復興論』(拙著『惡戰』參照)を草して、大にこの趣意を明にしたことがあつたが、今の時のやうに、人間が小利巧になつても、ものゝ道理は百も承知、二百も合點して居ながら、平氣で詐僞を働いたり、泥棒をしたり、曲學阿世、變節賣操、毫末もこれを耻かしいと思はないやうな駄人足には、説法も理窟も役には立たない。よろしく『體罰復興論』の趣旨によつて、○○○○グワーン○○○○○○○○ヒン曲る○○○○○ブン○○○○○○○○この意味に於て、詐僞師や泥棒や、曲學阿世の輩や、變節賣操の徒が、國民公憤の餘沫を受けて、頭に瘤の二ツや三ツ出來たからつて、自業自得とあきらめるより外、致方があるまい。既に法律の制裁が、犯罪者に體刑を以て臨む以上、社

會の制裁も、亦た惡人に向つて、體罰を加へて、一向差支へがない道理である。若し、そうでないと、人は巧に法網をくぐつて、法律上の刑罰さへ受けないやうにすれば、どんな惡事を行つても、差支がないといふやうな誠に以て、恐るべき危險思想が、段々殖えて來て、始末に了へないことゝなるであらう。

或は言ふであらう、然らば、十日の騷擾、新聞社破壊、交番焼打、電車破壊の如きは、全然これを是認せむとするのであるかと、僕曰はく、彼等國民は、憲政擁護といふ善なる動機を以て、憲政有終の美を收めやうといふ、美しい目的を以て、邁進して來た途中に於て、意外の抑壓を受けたがために、遂に熱狂し、熱狂した多數國民の群集心理が發動して、彼が如き醜

い手段を執ることゝなつたのであるから、僕はその動機を是認し、その結果を否認するものである。縦令、官僚の御用を勤むる走狗的新闻とは言へ、またこれ一個の公機関である。これに對する制裁の道は、放火、投石、破壊といふやうなことで以外に、いくらでもあらうと思はれるのに、最初より最後の手段に出たといふことは、暴行と言はれ、暴徒と言はれても、これを言ひ解く道はあるまい。殊に交番の如き、警察の如き、電車の如き、これを焼打ちしたといふのは、たゞ坊主憎くけりや袈裟までもといふの類で、全然理由のない盲動である。替爲である。交番や警察を焼き拂ふといふことは、秩序を紊亂し、公安を破壊し、且つこれが再築のために府民市民の負擔が増すといふことの外に、何人に對しても、何

等の制裁ともならないのである。如何に熱狂せるためとは言へ、如何に群集心理の發動とは言へ、こゝにいふ無益の仕事は、斷然止めて欲しい。今度の事件について、二ツの教訓を得た。一ツには群集心理の發動といふものは、誠に恐ろしい程、偉大の力を起すものだといふことを、痛切に知つたと共に、苟も政治家たり、宗教家たり、教育家たるものは、常にこの點に着眼して、巧にこれを運用して、いつたならば、如何なる大事でも、成らないといふことはあるまいと思つたこと。二ツには、僕は、平常人心が倦んで、意氣も張りもなくなり、従つて、制裁の力が亡びて居るのではあるまいか、殊に、青年が、眼前一身上の小利害にのみ屈托して、聊かも天下國家を憂ふるといふやうな、元氣が無くなつて居るのではある

まいかとはかり思ッて居たのだが、イザとなれば、社會的制裁も峻嚴に行はれるし、青年も亦、自ら進んで、政治運動に加はるの元氣があるといふことを認め得たことである。この二ツのもの、洵に國家が向上發展し行く上に取ッての、有力なる武器であッて、この武器の強弱は、やがてその國家の強弱を表明するものである。

そこで結論に曰はく、彼等は良民であッて、暴徒でない。暴行であッて、義舉でない。然り、これ實に良民の暴行である。暴行は眞に憎むべきであるが、良民は斷じて罪すべきものでない。(大正二年二月十二日夜「新佛教」)

▲國家と國民

國民は、時に國家の犧牲にならねばならぬこともあるが、従つて國家はまた、國民の権利や生命や財産を保護して呉れなければならぬこと、言ふまでもない。

人民がチヨイと役所へ出す書面できへ、様々の型があつて、その型にはまッて居ないと、すぐ召喚される。召喚もよいが、午前九時に出勤せよとの通知を正直に守つて出かけて往くと、大概は、二三時間以上は待たされる。少し御念の入

ツたのになると、午前九時が、午後三時頃までも、引ッ張られることがある。
日給何十錢で働いて居るといふやうな階級のものが、午前九時から午後三時までも、ペン／＼と待たされて、結局、「この一といふ字を壹といふ字に書き直せ」といふ位のことを申付けられるとしたならば、その迷惑は、如何ばかりであらうや。お役人の方は、それで月給が取れるのだが、人民の方は、おかげで、その日の米を買ふことが出来なくなるのである。かゝる場合には、わざわざ「人民を召喚せずとも、郵便で始末のつくやうな取計ひが肝要だと思ふ。」

役所の役人は、人を召喚することを、屁とも思つて居ないやうだが、役所へ勤めて居ない人民は、それ〴〵仕事があるので、役所へなぞ行つて居る暇はないのである。それを召喚するには、十分の同情を人民の方へ注いで呉れなくては困る。電話のある人民に對しては、電話でことを辨ずるやうにするもよし、さもないものには、成るべく郵便で事を處理して貰ひたい。萬止むを得ない場合に召喚するとしても、その時は、呼出時間を正確にして、無暗に人民に迷惑をかけるやうにして欲しい。

刑事事件で、證人として喚問されるといふやうな場合があるとすると、必ず一日だけは、棒にふらなければならぬことになつて居る。これも國民の義務だと思へばこそ、苦情も言はないのだらうが、日給の労働者などは、その苦痛堪へ難いものがあるのである。かゝる場合、國家はその職業に準じ、其の日給に相當する位の日當を、給與するやうにしなくては可哀相である。

そんなことは、まだ忍ぶべしだが、或る事件の嫌疑として拘引せらるゝとい

ふことの如きは、その嫌疑の晴れた場合、國家は何等かの方法を以て、これが名譽の回復を計つてやらなくては、濟むまいと思ふ。

嫌疑にせよ、何にせよ、拘引せらるゝといふことは、人間としての一大痛苦である。罪も報もない人民を、嫌疑があるからと言つて、この一大痛苦を與へて置きながら、「用が済んだから歸つてよろしい」といふ一言で、追ッ拂ひ、何等の報償をも與へないといふのは、如何に國家の權力とは言へ、あまりに慘酷ではあるまいか。

一日にせよ、二日にせよ、拘引せらるれば、その間の生計に難義する。幸にして「歸つてよろしい」となつても、世間は、恰もこれを刑餘の人の如くに思ふ。肉としても靈としても、言ひ知れぬ痛苦を感じしめらるゝこと、凡そこの嫌疑に勝るものはあるまい。重税の外に、更に常にこの種の義務までを、負擔するの覺悟がなくては、大日本帝國の國民たる資格がないのである。

四、高等師範學校廢止論

行政整理のために、高等師範學校を廢止しやうといふやうな考が、當局者の間に有るとか無いとかいふので、高等師範出身者の團體として、夙に日本の教育界に一大勢力を成して居る、茗溪會の人々が、陰にその反對運動を試み出したので、今や、この事は、教育界に於ける、重要な時事問題と目されることゝなつたのである。

ところが、僕は、去る明治三十九年の十月、元のユニテリアン協會今の統一基督教會に於て、既に「高等師範學校廢止論」と題して、一場の演説を試み、同年十二月の『新佛教』に、その論の大要を掲載して置いたのである。

爾來七八年を経たる今日となつて、再び、この論を繰返す必要があらうとは、當時に於て、夢にも思ひ設けなかつたところである。……繰返すと言つても、全然同じいことを繰返すのではない、前の論の足りないところを補足するといふ位のつもりである。

今の、行政整理のために、高等師範學校を廢止しやうといふのは、ただ、四高等師範學校廢止のために、年々六十萬圓の歳出を減ずることが出来る、國家として、六十萬圓といふ經費を節減したいために、四高等師範學校を廢止しやうといふのである。それには、勿論高等師範學校が、他のどの直轄學校よりも、一番、存在の理由が乏しいといふことも含まれて居るのであらうが、行政整理といふ事の性質から考へると、その主な

る目的は、歳出を減ずるといふに在ると見るのが當然である。しかし、單に、國家の歳出を減ずるといふために、國民教育の機關にまで斧鉞を下して、これを廢止するといふやうな荒療治は、チト穩かてないてはなからうか。縱令、國家の歳出が、現在の状態よりも、更に幾倍しても、國民教育上、必要なものであつたならば、存置は勿論、増設も亦甚だ結構なことと言はなければならぬ。即ち、僕の高等師範學校廢止論は、國家の歳出の増減といふやうなことに頓着しない議論で、若し廢止のために、國家の歳出が、六十萬圓も減じ得るならば、更にそれだけの費用を以て、高等學校でも、高等商業學校でも、高等工業學校でも、何でも、現代最も要求の多い學校を、増設することにしたといふのである。

何故に、高等師範學校を廢止しなければならぬのかといふに、高等師範學校は、既に、その設立の目的が達せられて、謂はゆる功成り名遂げたるものであるから、今はたゞ、身退くの一事あるのみで、即ち、最早存在の必要がなくなつたのであるから、廢校するより外に仕方がないのであるといふ、一本槍の理由で十分である。……その他の理由は、三十九年十二月の『新佛教』に詳説してある。……言ふまでもなく、高等師範學校は、中等教員(師範學校、中學校、高等女學校等の教員)を養成するところであつて、過去幾十年、東京師範學校と稱せられて居た頃から、今日に至るまでに、教員を出したること、實に算なく、今や全國各地、高等師範學校の出身者を見ないところがない程の有様である。従つて、日本の國民教育

上、高等師範の功績は、實に特筆大書すべきものであることは、今更言ふまでもない。それと同時に、各種の弊害を醸成したといふ罪も、多少はあらうが、その功の大なるに比し來れば、殆ど言ふに足らないことである。但し、過去に大なる功績があつたからといふので、既に必要のなくなつた今日、尙これを存置して置かねばならぬといふのは、甚だ筋の通らない言ひ分である。

或は曰はく、人口日に増殖して行く以上、今後、中等教育を受くるもの、年々多かるべきは言ふまでもない。従つて、中等教員は、今後ますます多くを要することになるではないか。この場合、高等師範學校を廢止したならば、教員の供給上、多大の支障を見はしなからうかと。僕曰は

く、そんな御心配は、全く御無用に遊ばされたい。早稻田大學あり、慶應大學あり、國學院大學あり、東洋大學ありて、盛に中等教員を製造(養成といふべきところだが)しつゝあるその上に、中等教員の檢定試験といふものがあつて、その志望者も、年々頗る多數を算するのである。殊に、四個の帝國大學から造り出さるゝ學士や、選科卒業生も、年々その數が増すに従つて、就職難の聲、次第に高く、中等教員志望のもの、いよゝ多きを致せる現状に見れば、高等師範學校を廢止するも、決して、中等教員供給上、何等の支障これなきこと、聊かも疑ふ餘地がない。

或は又曰はく、男教員の方は、それにも間に合ふとして、女教員の供給は、六ヶしいであらうと。これとても、決して六ヶしいことではない。

男教員と同じいやうに、検定試験といふ道もあるし、女子大學といふ學校もある。近頃、女子大學の出身者その他、やゝ高等の教育を受けた女子が、新しくなるとか、醒めるとか言つて、兎角世間の話頭に上るやうになつたのは、種々の原因もあらうが、彼等に、適當の職業を與へなかつたといふことも、確にその原因の一つであつたらうと思ふのである。口てこそ、師範學校や高等女學校の教員なんか……など、イヤにお高く止つて居ても、心の中では、同窓の誰彼か、就職赴任を、美しく思はずには居られないのである。それが、卒業後、三年も四年も無職で居ると、妙に氣位だけが高くなつて、今更、女學校の教員でもあるまいと、恰も、婚期を過ぎた老嬢の瘦我慢的獨身主義と同じやうに、無職を誇るといふやう

な態度に出なければならぬことになり、そこで、餘儀なく、醒めるの新しいのと、變なところへ、活路を見出すことゝなつたのもあらうと思はれる。果して然らば、女子高等師範などを廢止して、女子大學や、その他の高等教育を施す女學校から出たお嬢さん達を、その未だ新しからうとも醒めやうとも思はない前に、まづこれに職業を與へるやうにするといふのは、女の危険思想防止の上から考へて、確に善いことであると言はねばならぬ。

話は少し岐路に入るが、三重縣では、犬に車を挽かせて居るやうである。そしてその理由は、犬に車を挽かせるといふことは、犬に職業を與へるといふことである、犬に職業を與へるといふことは、即ちこれを尊

重するといふことである。従つて、職業を有する犬の飼主は、これを愛護すること非常なもので、彼等が戯言に「嬶が死んでも苦にはならないが、犬に病まれると困る」とさへ言ふ位で、動物虐待などいふことは、決して見ることが出来ないといふことである。今、新しい女と犬とを比較しやうといふのではないが、ただ女子に職業を興へるといふことは、即ち女子を尊重するのであつて、經濟上の獨立を要求して居る新しい女などは、大にこれを歡ばなければならぬことである。

しかし、これは、女の教員が、是非なければならぬとしての論であるが、更に一步を進めて考へて見るのに、全體、女學校にせよ、女子師範學校にせよ、女の教員でなければ、受持てないといふ學科があるだらうか。

男教員では、間に合はないといふ學科があるだらうか。修身、國語、漢文、數學、地理、歴史、理科、博物、圖畫、習字、悉く男教員で差支がない。體操の如き、もとより男の專賣と言つてもよい位であるし、……井口あぐり女史の如き女もあるが、……唱歌は、女學校には、女の教員が似つかはしいかも知れないが、どうせ、君が代に毛の生へた位のところを教へるのに、男だつて、女だつて、優劣のあらう筈はない。なまじツか、柴田環女史や、原のぶ子嬢のやうな天才に教へて貰つて、飛んだ教育までして貰ふよりは、男の方が結句無難かも知れない。家事科の如きも、男教員で教へられるし、どうしても女の專賣だと思はれる料理や裁縫でも、結局は男でなくて、納りがつかないではないか。洋服の裁縫師に、女は殆どない、

和服でも、氣の利いた仕立物は、大抵男がやつて居る。袴は勿論、足袋までが、男の仕事となつて居る。西洋料理のコックに、女は無い。日本料理でも、名ある料理屋の板前は、男にきまつて居る。どうも、かうなると、教員としての女の立場は、全くないといふことになつてしまつて、誠に氣の毒千萬ではないか。かういふ風に考へて來ると、女子高等師範學校を廢止したからつて、聊かも困りやうがない。

有つて益がなく、無くて困まらないばかりか、却つて國家の歳出が、六十萬圓も減ずるといふのであるから、これは、潔く廢止すべきものである。そして、若し出來ることなら、その六十萬圓で、高等工業學校でも、高等商業學校でも、高等學校でも、何でもよいから、これを増設して、年々増

加するばかりの入學志望者を、成るべく多く收容して欲しい。中學を卒業して、二年も三年も、志望の學校へ入學することが出來ないで、ブラ／＼遊んで居る間に、遂にヤケを起したり、誘惑されたりして、墮落する青年が決して少くない。高等師範學校を廢止したゝめに生じた費用を以て、これ等の青年を救濟するといふことは、國家として、當然の事業である。それでも、尙、餘裕があるならば、常に國家の事業の足らないところを補つて、國家に多大の貢獻をして居る私立大學を補助して、その設備を完全ならしめ、ます／＼多く、人才の養成に努めしめるといふことも、國家が、私學の功績に對する表彰の一法であらう。

廢校と同時に、職を失ふ教員が氣の毒だといふものもあらうが、實力

あるものは、高等師範學校を離れたつて、自分で自分の運命を開拓する位のことにはする。自分で自分の運命を開拓することの出来ないやうなもの、高等師範に喫りついて居たつて、早晩自滅するのである。人のために職を設けるといふやうな馬鹿なことをやめるのが行政整理の大眼目でなければならぬ。殊に、國家のためと言へば、戦争に出て、殺されることさへ平氣で居る日本の國民が、國家のために、月給に離れる位何だ。(大正二年五月十八日「新佛教」)

▲百千の駄婦人と一人の眞婦人

佛敎家の手で經營されて居る女學校は決して少くない、しかし、いづれも、文部省に媚び、時流に阿つて、我こそは「佛敎主義」だと名乗りを揚げて居るものは、

殆ど見當らない。學校繁榮策としては、止むを得ないのかも知れないが、「佛敎主義」と名乗りを揚げることの出来ないやうな學校なら、必らずしも、佛敎者の經營を待つ必要はない。世間には、學校屋といふ一種の商賣人が居て、その方が遙に經營が上手である。

然るに、小林君の高輪淑女學校は、この間に立つて、毅然として「佛敎主義」を標榜し、校主小林君、また自ら「淨土眞宗の信者」と名乗り出て居る。その態度の眞摯にして、且つ雄々しきこと、實に薄志弱行の輩を以て填められて居る、現時の佛敎界中、稀有の事と稱すべきではないか。

今や、この學校、創立第十週年を迎へるといふ。十年の苦辛、十年の歴史、實に尊重すべきものである。今後また、この過去の歴史を、汚すが如きことなからむを、冀はざるを得ない。過去の歴史を汚さざれといふは、經營難に甘んぜよといふのである。過去の辛苦を將來も持續せよといふのである。「艱難爾を玉にす」、百千の駄婦人を作らむより、一人の眞婦人を得むこと、誠にこれ、高輪淑女

學校の使命ではないか。(大正二年三月一日「淑女」)

五、代議士論

(一)國民の選良

國民の選良といふからには、自分の知らないうちに、國民の多數が、選舉して呉れたので、それなら一番、その信任に酬いるだけの働きをしやうかい、といふことでなくてはならない、然るを、どうか自分を選舉して呉れいと言つて、有權者を頼み廻はつたり、金を使つて投票を集めたりするといふに至つては、それだけでも、已に國民の選惡だ。

代議士は、「たらしむ」とすべきものではなくて、「たらしめらるべき」もので

ある。而してこの度の總選舉で、當選したる四百に近き代議士中、「たらしめられたる」もの、そも幾人ありや。

(二)選舉人

自分の代理人を出すのに、自分で人物の良否を見分け得ないで、他人の仲人口を信じ、それで選ぶさへ笑ふべきに、金を貰つたり、御馳走になつたりしたので、この馬の骨ともわからないやうなものを、出してしまふなど、随分、没分曉千萬のものが多し。

代議士候補者も亦、有權者を目して、決して人間だとは思つて居ないらしい。それが證據には、どの新聞にも、有權者を選舉場に「狩り出す」と書いてあつた。

ア、「たらむ」とする代議士と、狩り出されたる有権者と、而してこれでも、立憲治下の國民である。

(三)理想選舉

この間に立つて、やゝ出色なのが理想選舉といふことである。しかしこれとても「たらむ」と欲したる點、已に僕等の謂はゆる理想的ではない。たゞ戸別訪問をしないと、辯論の力にのみ依つたとかいふことが、多少、他の有象無象に優つて居るといふだけである。

この次の總選舉には、更に「理想的理想選舉」といふことが行はれるやうにありたいと思ふ。

(四)承諾書

君を選舉するよといふ承諾書を、一萬何千も集めた人が、開票の結果、二千何百票しか無かつたり。某候補者の日本橋區の事務所へ、選舉の當日、君を投票して來ましたと言つて、挨拶して行つた人が、六百五十人もあつたのに、いよ／＼開票となると、たつた三百四五十票しか無かつとかいふ事實は、一體何を語つて居るのだらう。

國民の政治思想が幼稚だなどいふのは、まだ未だ。歸するところは、人間靈性の墮落である。宗教を信じ、宗教を傳へむと欲するものゝ、努力と奮闘とを要すべき時である。

(五)總選舉と角力

總選舉が濟むと、すぐ國技館の大角力が始まつた。彼は智力の争で、

此は體力の争である。彼は文明的の争で、此は野蠻的の争である。

智力の争、文明的の争と言へば、如何にも耳觸りは善いが、その實際陰險を極め、醜陋を極め、殆ど人を以て論ずる能はざるものさへあつたのである。これに反して、體力の争、野蠻の争と言へば、如何にも耳觸りは悪いが、その赤裸々たる、露堂々たる、一點の汚れたるなく、半晝の隠すところなく、誠に好愛すべきものがある。

(六)内助と内妨と内實

「候補者の妻」といふ記事を新聞で讀んで、どの候補者の妻君も、よく内助の功のあつたのに感心した。

苟も男子世に立つ、婢の内助などを、當てにするやうで、何が出来る。

……とは言ふものゝ、子供の世話から、臺所のことまで、夫の力を借りるにあらざれば、處理してゆけないといふやうな妻は、これ内助にあらずして内妨である。内妨あり、男子何としかて、能く外に活躍することが出来やうや。

人の妻君を内實ともいふ、内助の功あるものにして、始めてこの尊稱を與ふることが出来る。世の婢共、必ずしも内實たれとは言はず、せめては、内妨たることなかれ。

(七)椽の下力持

一將功成り萬骨枯る、イヤ、萬骨枯れて、こゝに一將の功が成るのである。偉勳赫々たる一將の椽の下には、實に萬卒の枯骨が隠れて居るの

である。

一人の代議士を出さむがためには、その椽の下に、幾百千人の力持ちが、あつたといふことを忘れてはならない。

人悉くその將とならむことを欲し、その代議士たらむことを欲しては大變である。又、人は常に、椽の下の力持たるに了るべきものだと、自分て相場をきめてかゝつても困る。凡そ人は、一面常に、謂はゆる一將たらむと欲するの志を失はざると共に、他面常に、謂はゆる萬骨となつて枯るゝの雅量がなくてはいけない。

椽の下の力持、その力もまた、甚だ偉なるものがある。『新佛教』

▲今日の政界と犬養木堂氏

兎角の批評はあるが、犬養氏は氣持の好い人だ、好きな人だ、丁度思想界に三宅雪嶺先生が居られるやうに、政界に犬養氏の居るとは、以て大に人意を強うせしむるに足る。三宅先生の議論と雖も、一から十まで、悉く敬服する事ばかりある譯ではないが、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はぬ先生の態度が偉い、犬養氏が三十年間苦節を守つて渝らざる秋霜烈日の如き操守が嬉しいではないか。併し犬養氏は恐らくは現代の政治家として成功する人ではあるまい、政治といふものゝ本來、政治家といふものゝ本來から言つたら、どうかも知らないが、今日のやうな政治、今日のやうな政治家の中にあつて成功するに、は、モウちつと惡黨に成らなければ駄目だ、惡黨と云つては語弊があるかも知れないが、僕は常に斯う思ふ、今日の政治家として成功するには、少くとも、星亨氏のやうに豪膽であるか、原敬氏のやうに老獪であるか、大石正巳氏の茫漠か此三つの内の一つは是非なければならぬ、と。尤も大石氏の茫漠は、今まで何事をも成して居らぬが、夫れでもまだ何事をか成し得る可能性はあるやうに思

今日の政界と犬養木堂氏

へる。然るに犬養氏は、以上三つの一をも有しない、要するに、今日の政治家として大成すべく、餘りに純潔である。

犬養氏は時代の先覺者である、其思想は常に時代に數歩を進めて居る、斯るが故に、氏が若し起つて内閣を組織しても、それは恐らくは失敗に終るであらう、けれども、時代の監視者、指導者として、刺戟、清涼劑として氏の如きは是非無ければならぬ人物である。斯點に於て僕は、今日の我政界に犬養氏の在ることを心強く思ふ。(『世界雜誌』)

▲桂西園寺二氏以外何人か首相の適任者なる

一、現今の日本に於て、西桂二卿の外、首相たるに適任なりと認むべき人は尠くない。併し今はたゞ林董伯一人だけを擧げて置かう。
二、その理由は、僕はもう薩長の我儘(殊に長閑の)に飽いた。勿論官僚政治はうんざりしてゐるといつて、政黨の不埒も言語同斷だし、政治家から政治屋に至るまで、皆たゞ自分の懐あるを知つて國家や人民を忘れてゐる。こういうふ時に

は林伯のやうな薩長出でもなく、官僚派でもなく、政黨員でもなく、而して、悪事を爲すことを知らない人物を首相として、人格中心の善政(比較的)を布かせたいと思ふのである。

三、陛下の御親任といふ事が首相たるべき人の重要條件だといふ事になると、未だ一度も拜謁さへ仰付けられた事のない人は、到底首相たる資格がないといふ事になるかも知れないが、僕は、ならう事なら三宅雪嶺博士を首相にして見たい。

博士の學と識と徳と意氣とは優に現代を壓するに足るばかりでなく、獨立自尊、どの方面に向つてもどの階級に向つても言ふべきを言ひ、爲すべきを爲し得るもの、天下博士の如きは、實に唯一人である。この人をして、若しその學と識と徳と意氣とを傾倒して、思ふがまゝに振舞はしめたならば、どういふ政治を施されるであらうか。一寸考へただけでも、食指まづ動くの感を禁じ難きものがある。

桂西園寺二氏以外何人か首相の適任者なる

憾むらくは、博士は何よりか、役人が一番大嫌ひだそうだ。(明治四十四年十一月の『新日本』)

▲小野梓君

四月の『新日本』に出て居た、上島長久君の小野梓傳の一節に曰はく。氏は、學校を起して、其好學の念を満たしたるも、尙之に満足せずして、今日の「富山房」の前身たる書肆「東洋館」を起し、自ら書店の主人と爲り、店頭に出て、事務を見るに至れり、其目的や、歐米の新書を輸入して、國民の知識を進め、若くは邦語の新書を出版して、新健の思想に貢献するに在り。開館廣告の冒頭に云ふ、「東洋の文化にして、進むべからざらしめん乎、即ち止む。苟も、之れを進むるを得むか、本館の起る、決して無用の業に非ざるを信ずるなり。」と。豈、堂々として、偉大極まる書肆ならずや、而も、西人の所謂眞理は書肆の損失せる書中に多し。」の語は、其れ自身に於て眞理なり。流石の小野氏も、此眞理に敵する能はず、事業の不振に陥りたる時、突如咯血して、病臥三ヶ月遂に起

だす、明治十八年一月溘然易篋せり。年僅に三十五。

と。小野君は、一代の人物を以て許された人であつて、僕なンドの、とても企及し得べきものではないに相違はないが、その學校教師をやめて本屋になつたといふ經歷と、病氣で血を吐いたといふこととは、誠によく似通つて居る。君は三十五で歿したといふが、僕は幸にして三十九の今日まで、兎も角も生きて居る。生きては居るが、謂はゆる瓦全で、小野君の玉碎せるに比し來れば、誠に以て慚愧に堪へない次第である。長命必ずしも望ましいことではなく、短命も亦必ずしも望ましいことではない。たゞ、自己の生の力が、廣く永く、強く、鋭く社會に影響して、常に社會に、一種の刺戟を與へて居るやうにありたいと思ふこと、甚だ痛切である。

六、三教會同と三教者招待

(床次總裁と奥田文相とを訪ふ)

(二)床次氏訪問の理由

僕は、元來、お役人が嫌ひである。お役所へ出入することが、イヤである。しかし、天下國家のためには、自分の好き嫌いを、犠牲にしなければならぬ。そこで、昨年時の内務次官であつた、床次竹次郎氏が、三教會同を計畫した當時、一には、その謬見を打破し、又一には、宗教の權威を認めさせやうといふために、同氏を内務省に訪問して、大に論戰したことがあつたが、床次氏も、行きかゝり上、全然僕等の議論に屈服する譯にも

ゆかないので、多少、模様を改めて、兎も角も、三教徒を會合させたが、僕等から見れば、全然、失敗であつたとより外言ひやうがない。

然るに行政整理のため、宗教局が、内務省から文部省へ所管替になつたについて、文部大臣は、三教徒を、同時に同處へ招待して、一場の挨拶を試みるといふことが發表せられると共に、専ら、これは、床次氏が、昨年の三教會同の失敗を盛返さむとする一種の雪辱戦とも見るべきものであつて、奥田文相の背後には、床次總裁が隠れて居て、頻りに糸を繰つて居るのであるといふ風説が立つて來た。若し、果してそうだとすると、床次氏も、随分わからない男である。去年、あれ程説法して置いたのに、また、同じ過ちを繰返すといふのは、一體どういふ譯のものか、全體

寺院佛教や教會基督教には、眞の信仰は活躍して居ないで、却つて有志宗教家の間に、宗教の眞精神が奮勃として居るのである。然るを、この形骸的なる、寺院佛教の事務員たる各宗の俗僧や、教會基督教に、月給で雇はれて居る職業的牧師輩を、何程集めて見たところ、零は何倍しても零であると同じやうに、決して何等の所得もあるべき筈がない。のみならず、國法の上では、佛教や神道は、基督教とは、全然其の監督上の手續きが違つて居る。露骨に言へば、神道や佛教は、日本の國家が、國法の上で、宗教として公認して居るのであるが、基督教は、國法の上では、これを認めて居ないで、たゞその布教傳道を、黙認して居るといふにしか過ぎないのである。かゝる關係の三教者を、宗教の監督官廳が、卒然一し

よに招待して、對等の取扱をするといふことは、不文の間に、基督教をも、神道や佛教と同様に公認するものであつて、その措置、甚だ公平を缺くといふ非難を、免れる譯にはゆかないといふことは、口を酸くしてこれを説いたのであるのに、今度再び三教者を同時に招待させるといふやうなことが、果して風説の如く、床次氏の方寸から出たものとすれば、確に、詰問の價があると思つたので、七月四日午前十時、僕の嫌ひな、お役所としての鐵道院に、僕の嫌ひな、役人としての床次氏を訪うたのである。

(二) 床次氏との會談

床次氏との會談に依つて、餘り多くの要領を得ることは出来なかつた。しかし、僕は、僕の言はむと欲するところを、遺憾なく言ひ盡して、或

は、同氏の反省を求め、或は同氏の熟考を請ひ、得たばかりでなく、時に或は、心弦共鳴の快もないではなかつた。左にその要點だけを摘記しやう。(○は僕△は床次氏)

○今度、文部大臣が、三教者を招待するといふについては、世間では、専ら、貴君が、その黒幕であつて、昨年の三教會同の失敗を盛り返さうといふのだといふ評判があるが、事實なりや。

△宗教局が、内務省から、文部省へ所管替になつたについて、文部省が、各宗教家を招待して、披露の挨拶をするといふことは、監督官廳としては、當然のことであるが、たゞそれについて、僕がその黒幕になつて、奥田文相を操つて居るといふ風説があるならば、僕は、世間が、如何に僕を買

被つて居て呉れるかを、甚だ光榮に感ずる。

○明晩、精養軒で、宗教家、教育家、學者などが、會合して、何か、宗教大會開催とかの相談會を開くといふことだが、これには、何か意味のあることにや。

△文部大臣の三教者招待のために、各宗教家が集まるといふ好機會を利用して、教育家、學者、軍人、その他の階級の、宗教に多少でも志のある人々を一堂に會して、談話を交換するといふことは、各種の人物が、宗教に同情を表して居るといふこと、及び宗教家に敬意を表するといふ事實を示すものであつて、宗教及び宗教家に取つて、利益あることではあるまいか。そこで、そつといふ會を催したらどうだといふ希望のものが

發起人となつて、まづ五日に、その下相談會を開き、その相談會の模様で更にその大會……三教徒だけでなく、各方面の人々を加へて……を開きたいと思つて居る。勿論、僕には、僕一個の考もあるが、こういふことは、僕一人の考で出来ることではないから、志を同じうする人々と協力してやりたいと思つて居る。

○昨年、内務省で會見した時には、この三教會同といふことは、決して現政府だけの事業でない、又自分も、官に在らうが野に下らうが、決してこれを忘れずに、永久の繼續事業として、大に力を注ぐといふ談であつたが、今年は何故に、自ら堂々として駒を陣頭に進め、矢張り、床次の三教會同であると言つて、名乗り出なかつたのか。關係あるが如く、無きが

如く、曖昧の内に事を進めるといふ風で、従つて世間からは、黒幕だの、傀儡だのと、種々の風説も起つて、その態度の男らしくないこと、その旗幟の鮮明でないことは、貴君の平常に似ないではないか。

△イヤ、その志は餘りあるのだが、實は、こういふ新しい方面(鐵道院のこと)へ放り込まれて、薩張り方角のわからない新參もの、悲しさには、一生懸命に勉強してもなか／＼追つ附いてゆけそうもないといふ有様で、到底、他の方面へ力を盡すといふ程の餘裕がない。公然にも、内證にも、僕自身が中心となつて、宗教界の事に努力するといふことは、當分六ヶしい。たゞ、他の諸君の驥尾に附して、聊かづゝでも、豫ねての理想を實現したいと思つて居るだけのことである。

○ 昨年の三教會同は、どの方面から考へても、失敗だと思ふが、高見如何。

△ イヤ、僕は、そうは思はない。少くとも、宗教に冷淡であつた一般世人が大いに宗教に對して、注意するやうになつて來たといふことは事實である。教育界でも、宗教といふものゝ力の大きなることを、痛切に感ぜざるを得なくなつたといふのも、基督教に對する國民一般の考が餘程寛容になつて來たといふのも、共に昨年の會の効果であらうと思つる。勿論、昨年の三教會同は、たゞあれだけのことをやらうと思つて居たゞけて、その思つて居たことをやり遂げたのであるから、僕は大に満足を感じて居る。

○ 一般國民が、基督教に對して、寛容になつたといふことは、不可なきも、基督教徒が、動もすると、國民性に背反する言動を爲すのは、何とか制裁の道がなくてはなるまい。

△ 實際は、諸君の心配する程でもあるまい。年一年に、日本化して來て居るのだから。

○ 何かと言ふと、三教者といふことになつてしまつたが、基督教は、別として、政府の認めて居る神道でも、佛教でも、これはたゞ神道や佛教の形式的方面、即ち、形骸であつて、そこには、宗教の生命も精神も働いては居ないのである。基督教にしても、教會に屬して居る牧師などの中には、矢張りこの形骸的宗教家が多い。即ち、政府の集める三教者は、正し

い意味に於ける宗教家でない、坊主家である、宗教家の死骸である。そんなものを集めるよりは、寧ろ、宗教界の在野黨、宗教界の民間有志家を招待した方が、大に生きた宗教的精神に觸れることが出来るのである。

△勿論、宗教界に於ける有志家の實力は、認めないといふのではないが、政府として何かするといふ場合は、どうしても、直接に關係の出來て居るものだけを相手にするといふより外に仕方があるまい。しかし、宗教大會といふやうなものでも開くといふ場合には、有志家諸君にも、成るべく出席して貰ふやうにしたいと思ふ。

○宗教大會といふやうなものを開いて、多數の人間が、一度位晩餐を共にしたところで、何の得るところもあらう筈がない。それよりは、昨

年も言つたやうに、人物中心の會合を催して、打寛いて、談話を交換するといふ方が、遙に有益であるに相違ない。

△それは、昨年、君から八釜しく言はれて居るので、多少考へては見だが、どうも僕一人では、微力で、とてもその任に堪へ得まいと思つて居る。マア、近く宗教大會でも開いて見たら、各種の方面から、いろ／＼の話も出るであらうし、延いて、そらいふ會が、成立するやうになるかも知れない。

○先日、『中外日報』にも、一寸論じて置いたのであるが、宗教局が所管替になると共に、局長以下、重なる役人は、すつかり變つてしまつた。從來の宗教局の役人でさへ、僕等から見れば、宗教界の真相には、全く盲目

てあつたと言ひたい。況んや新來の局長以下の人々では、とても宗教界の真相どころか、宗教界の皮相さへもわかるまい。そこで、その最高顧問ともすべき、一ツの會議を起したらよからう。例せば、教育の方面に於て、曾てあつた高等教育會議のやうなものか、今度出來た教育調査會のやうなものでもよい。兎に角、宗教局の諮問機關を設けたがよいと思ふが、高見如何。

△サア、随分人選に困難を感ずるだらう。しかし、それは、確に必要である。奥田文相にしる、柴田局長にしる、宗教界の事情に通じて居るとは言へまい。従つて、さういふ會でもこしらへて、その意見を聴くといふのは、よいことである。必ずしも、さういふ會議ばかりに限らない、苟

も宗教家の會合であつたら、都合の出來るだけ都合して出席し、宗教家の様子を見るといふことは、必要なことである。そして、その謂はゆる宗教會議は、必ずしも官設でなくともよいではないか。又、宗教家ばかりの會合でなくともよいではないか。學者も加へ、教育家も加へて差支はあるまい。ギユリック君なども、さういふ考を持つて居て、頻りにそれを言つて居る。

○ギユリックと言へば、例の歸一協會は、近來餘り評判が善くないやうだが……。

△あの會も、一寸變つて居るよ。僕なんぞの考は、すべて、理窟を言つたり、批評したりするばかりでは満足が出來ない。勿論、それも必要だ

が、そればかりでは面白くない。その理窟、その批評が、直に實際の仕事の上に現はれ、若くは現はさなくてはつまらない。

(三) 床次氏談話の歸結

床次氏との會談は、これに盡きたのではないが、主要の點は、この外に出ない。要するに、床次氏の語るところ、今年の文部省の宗教家招待會には、全く無關係であること、五日の宗教大會準備會には、發起人の一人として參加して居ること、宗教家を中心として、各種階級の宗教に興味を有して居る人々を、一堂に會して、談話を交換するといふことは、少くとも、宗教に同情する人々の多いといふことを、世間に示すものであつて、たゞ顔を集めたといふだけでも相當の功果のあることゝ信ずると

いふこと、勿論、さういふ大會が開けるとすれば、それは全く有志者の發意になるものであつて、全然官臭も帯びず、又、僕が催した昨年の三教會同とも、直接の聯絡もない會合で、従つて、成るべく多方面に案内狀を出して、全然開放的態度を執るといふことを、言明するに憚らないといふことであつた。

しかし、新聞紙の報ずるところによると、床次氏のこの辯明を、根柢より覆すことも出来るやうな報道もある。少くとも、多少これを割引しなればならないやうな記事も出て居る。しかし、彼を非とすべきか、此を是とすべきかは、將來を待つて斷ずべきであらう。

(四) 奥田氏訪問の理由

三教會同と三教者招待

僕は床次氏と會見の結果、直接に奥田文相に逢つて、僕の意見を述べ、置く必要を感じた。全體、奥田文相は、就任以來、日尙淺きにも拘らず、教育界の積弊に向つて、着々として大斧鉞を下し、由來伴食と相場のきまつた文相の位置を、森有禮、井上毅兩子の時代にまで、盛り返し、一代の名文相として、現内閣の花形として、大に世に讃嘆せられて居る。この人ならば、話をして、多少話甲斐があらうと思つて、これも現内閣の人氣役者の一人たる、床次氏の紹介で、七月七日午前八時、文相の私邸で會談した。

昨年、床次氏の計畫した三教會同の時には、時の宗教局長斯波淳六郎の名を以て、案内狀を出したのだが、今年の奥田文相の催しは、文部大臣

奥田義人の名を以て、招待狀を發して居る。即ち昨年のは、「三教者會同」であるし、今年のは、「三教者招待」である。その態度から言へば、昨年よりは、今年の方が、遙に禮を盡したものと稱すべきである。即ち、縱令、形式的にせよ、奥田文相は、謂はゆる宗教家に對して、相當の敬意を表して居る。この點は、一段の進歩である。

たゞ、それが、世間傳ふるが如く、床次氏の三教會同と、必然的な關係があるものとする、と、感服する譯には、ゆかない。談は、この邊から徐々として進めることにした。(○は僕□は奥田文相)

(五) 奥田氏との會談

○昨年時の内務次官床次氏が、三教會同といふことを計畫した時に、

吾々は極力これに反対して、遂に不成功に終らしめたと信じて居るのであるが、今度、文部省でも、亦三教者を招待するといふのは、どういふ意義であるのか、又、昨年の三教會同と、何等かの関係があるのか、その邊のことを承りたい。

□別に深い意義といふ程のことはない、たゞ宗教局が所管替になつたので、三教者を招待して、一應挨拶をするといふだけのことである。又、昨年の三教會同とは、全然無関係である。

○かういふ招待會は、今年一度だけのことなりや、毎年催す考なりや。

□將來のことは、まだ一向考へて居らない。

○三教者招待に、佛教者や、神道者と同時に、基督教者をも招待するの

は、公平を缺くものではあるまいか。佛教や神道は、管長制度の下に、種々の拘束を受けて居るのみならず、被選舉權さへ與へてないのに、基督教は、全く自由に開放されて居て、何等の拘束もないし、何等の取締法もない。形式の上から言へば、日本の國家は、國家として、公に、基督教を日本の宗教とは認めて居ない筈である。然るに、今これを、監督官廳たる文部省が、大臣の名を以て、日本の宗教と認めて居る神道や佛教と同様に、招待するといふことは、明にこれ、基督教を、無條件で日本の宗教と認むるといふ結果になるのであつて、甚だ公平を缺くの處置と稱されても仕方があるまい。如何。

□不公平だの公平だのといふことは、一向考へて居ない。實は、最初

は、秋にでもなつてから、三教者を、別々に招待して、打解けて談話を交換したいと思つて居たのだが、所管替になつた爲めの披露の招待會が、そう延びてもをかしからうといふので、暑中休暇前にすることにしたのである。暑中休暇前に開くとすると、三教者を別々に招待して居るといふ程の餘裕がないので、合併して招待することにしたといふだけのことである。又、已に、昨年も、三教者を同時に會同させたといふ前例もあつたのだから、かたぐ、同時に招待することにしたので、その外に、別に公平だとか不公平だとかいふことを考へてしたことは、ない。

○しかし、實際上、宗教局の監督方法、即ち取締方の相違して居る三教者を、同様に招待するといふとは、不公平といはねばならぬ。若し、基督

教をも、管長制度の下に支配するか、さなくば、佛教の管長制度を廢して、基督教のやうに、自由に布教傳道もさせ、被選舉權をも與へるやうにした上でならば、三教者は同時に招待するといふとは、正當となるのであるが、現在の状態で、卒然三教者を同様に招待するといふことは、個人としてならば、格別、苟も監督官廳たる文部省の大臣としての仕事としては、不公平の誹を免れる譯にはゆかない。

□ 面白いことは、將來の問題で、今急にどうするといふ譯にはゆかない。何分、まだ、宗教局が移つて來たといふだけで、何にも手をつけては居ないのである。まア、いろくの話も聞き、研究も重ねて見たいと思つて居る。それから、まだ公然御發表にはならないが、有栖川宮殿下

が薨去遊ばされたについて、三教者招待は延期することにして、昨夜、それ／＼電報で通知を發したので……。

○……しかし、どうせ一度は開催されるのでしやうが、その時は、是非三教者を別々に招待することにして貰ひたい。

□さア、已に、三教者を同時に招待するといふ案内狀を出したのだから、延期の後であるからと言つて、別々に招待するといふのも、何だか面白くないと思ふが。——兎に角考へて置かう。

○前宗教局長の斯波君などは、随分永く局に當つて居たのだから、宗教界の事情には、精通して居られるべき筈なのに、一向その眞相に通じて居られなかつた。従つて、積極的に、宗教界に何等の貢献もせられな

かつた。然るに、失禮ながら、貴君等を始め、今度の新宗教局長は勿論、その他の局員も、全く宗教界の事情に盲目であると思はれるが、複雑なる宗教界の事情に通じないで、いろ／＼の施設をしたり、取締つたりするといふとは、困難でもありまた危険でもある。ついでには、曾て教育界にあつた高等教育會議や、今度新設された教育調査會のやうなものを、宗教界にも作つて、宗教局の最高諮問機關としては如何。

□それは、頗る善いことだと思ふ。がしかし、随分人選が六ヶしからう。

○そりや六ヶしからう、しかし、教育調査會の委員の顔觸れでも、不満足だといふ人もあるし、満足して居る人もあるやうに、どんなに苦しん

て人選しても、萬人が満足するといふやうなことは望まれない。大抵のところでは、やつて見ればどうです。勿論、文部省としてやることが出來なければ、個人として、そらいふ會合を催してもよいと思ふ。

□今すぐに、どうするといふことは言へないが、兎も角も考へて置かう。

○基督教や神道は別として、佛教界だけと言ふと、佛教の精神は、寺院佛教、宗教局の認めて居る本山佛教には殆んど無くて、却つて、有志佛教徒の團體、例へば、我が新佛教徒同志會とか、河瀬秀治翁が、二十年來苦心經營し來りし、上宮教會とかいふ團體に、存して居るのである。寺院佛法は、葬式とか法事とかが專業で、ずつと上等なところで、爺さん婆さん

に説教をする位のものであつて、活潑々地の現代青年とは、殆ど没交渉である。その中に、新佛教徒同志會や、上宮教會があつて、纔に彼等青年の精神的饑渴に満足を與へむと努力して居るのである。くどいやうだが、佛教の眞精神は、寺院佛教、宗教局佛教に亡びて、僅に有志佛教の中に活きて居るといふことは、十分に認めて置かないと、宗教取締上、種々手落が生ずるかも知れない。

□よくわかりました、いろ／＼話も聞き、段々研究もして見たいと思ふ。

右の外、宗教學校の將來に關する意見、これは、僕の宿論と、全然符節を合するもので、若し文相自ら、何等かの積極手段を執るに至らば、頗る痛

快なことだと思つたが、特にこの話は新聞雑誌に公表することは、困るといふことであるから、こゝには紹介しない。三教者招待に關する料理の六ヶしいこと、三教者招待の席では、十分に打寛いて、談話を交換するといふことが、六ヶしからうといふことなどについての談話あり、僕も亦、西園寺侯が、個人として、文士を招待せられたと同様の形式で、宗教界の中心人物を招待して、懇話する方が、どの位有益であるか知れないといふことなどを語つて、更に他日を約して辭して歸つた。

(六)佛・教・徒・の・覺・醒

前にも言つた如く、奥田文相は、床次總裁と共に、現内閣に於ける二大勢力で、これまで已に、諸種の英斷を試みて居る、將來と雖も、随分仕事を

爲し得る人だと思はれるが、何分、宗教界のことには、全くの素人で、一向見當がつかぬらしい。宗教の形骸以外、宗教の眞生命眞精神の存在するところを知らせるといふことは、少くとも僕等の任であるといふことを、痛切に感じて來た。

それと同時に、世の謂はゆる宗教家……三教者……僕の謂はゆる坊主家輩が、常に政府萬能の夢から醒めやうとしないで、何かと言へば、直に政府の力に縊がらうとする、その無氣力なる、意氣地なき有様は、眞に唾棄すべきものであるといふ感を禁じ難いのである。政府者の招きと言へば、全然、國法上の待遇の相違して居る、基督教徒と同席の會合さへ、尙且つ、歡喜踴躍して馳せ參ずるといふ程の腑甲斐無さ、殆ど言語道

斷の始末ではないか。又若し政府にして、此くの如き三教者を會して依つて以て、國民道德上、多少の貢獻を得やうといふ考ならば、一笑だも價しないし、又、三教者も、政府に依頼して、何事か便益を得やうといふならば、まづその乞食根性が、僕等の言ふところの宗教本來の面目から見て、打破しなければならぬし、又、三界の大導師として、王者と雖も拜すべからずといふ見識を備へて居らねばならぬ筈の宗教家が、局長風情の俗吏の支配の下に立つて、命これ従ふといふが如きは、宗教の尊貴、宗教家の威嚴のために、衷心から慨歎すべきことではないか。苟も宗教家は、常に教へるといふ態度に出づべきものである。大臣でも元老でも、會つたが最期、これを教へなければならぬ、導かなければならぬ。

然るに、却つて、その袖に縋がつて、何ものをか得やうとする態度は、誠に見下げ果てたものではないか。

(七) 基督教徒と國民性

神道の如き、ことより言ふに足りない。基督教者の近來の意氣地無さは、何といふものぞ、全く外國の傳道會社の補助無くして、教會の體面を維持して居る教會がどれ程あるか。その唯一の頼みの綱たる外國の補助も、年々減額せらるゝところから、意氣頓に阻喪して、今度は、權勢に阿附して、聊かでも樂に教會を維持し、自身の生活を營まうといふので、自ら進んで、三教者會同に賛成するといふみじめな有様、最早到底、彼等の間に、異教者を征服するといふやうな、旺んな意氣を見出すことが

出来なくなつた。この分て進んで往つたら、外國の補助が無くなると共に、日本に於ける基督教の教會は、全然亡びて仕舞ふであらう。……その方が、國家のため、國民のため、結句幸福であるかも知れない。

元來、基督教徒が、日本の國民精神の如何なるものであるかといふこととに關して、徹底した理解を有しないものゝ多いのは、極端なる寛容主義者と稱されて居る僕等てさへ、甚だ遺憾に思ふのである。況んや、その他の人々に在りては、これを國民性に反し、國家に危険なる亡國の宗教となすのも、強ち無理からぬことである。將來、自滅する覺悟が出来て居るならば論はないが、苟くも、日本に於て、將來ます／＼その教線を広げて往かうといふ志があるならば、まづ、自ら、日本の國民的教養を受

けなければなるまい、日本人としての、國民性の修養に、全力を傾倒しなければならぬ。

(八) 結語

佛教徒も自覺し、基督教徒も自覺して、こゝに各教各々清健なる自治の能力を發揮し、政府又、宗教の自由解放を原則として、各宗教の待遇監督を平等にするに至らむこと、これ實に僕等の理想である。この理想にして實現せられむか、三教者招待とか、三教會同とかいふ枝葉の事件に、人を勞するやうな愚なことは、自然に消滅するであらう。(大正二年七月十四日『新佛教』)

▲高等宗教會議を起せ

高等宗教會議を起せ

お役人が、宗教界の事情に通ぜざること、今に始まつたことにあらず。從來、多年、宗教局長として、最も宗教界の事情に精通して居るべき筈の斯波淳六郎君の如きさへ、尙且つたゞ僅に、法令と交渉ある皮相形式の一部分を知れるのみにして、その裏面の消息に通ぜざることとは勿論、未だ聊かも、宗教界の真相を看取し得ざりしなり。これを以て、從來幾度か、宗教界に紛擾を醸したることありしにも拘らず、宗教局なるものは、無能無爲、毫末も、監督官廳として、適當の措置を執りしことこれなしと稱するも、敢て誣言にあらざるが如き状態なりき。

その間、やゝ事理を解せりと傳へられたる、前内務次官床次竹次郎君は、大に宗教界に向つて手腕を揮はむとし、三教會同を思ひ立ちたりしが、これまた、宗教界の事情に盲目なりし結果……、宗教界の真相を知らざる二三學者の言のみに聽きし結果は、遂に彼が如き失敗を招きたりしにあらざや。若し、彼が如き企畫も、宗教界のことに精通せるものを顧問としたらむには、或は意外の好果を收め得たりしやも、未だ知るべからざりしなり。

元來、僕等は、宗教界の事は、宗教界の自治に一任して、政府若しくはお役人の保護や干渉を、絶対に拒絶せむことを以て理想とするものなり。されど、國法を以てこれを監督するは國家の權利にして、この監督に従ふは、宗教界の義務なり。されど、苟も國家が宗教界に向つてその義務に従順ならむことを要求せむと欲せば、その監督上の手續に於て、一々宗教界をして、承服せしむるに足るだけの用意と確信とを有せざるべからず、而して此くの如きの用意と確信とは、到底月並のお役人輩——宗教界の事情に盲目なるお役人輩の、得て企つべきところにあらざること言を俟たず。

頃者、制度整理のため内務省の一局たりし宗教局が、文部省に移管せられ、局長、事務官、その他の小役人、亦多く新に任命せられたり。從來、多年の經驗ありと自負せる前宗教局員すら、僕等よりしてこれを觀れば、殆ど全く門外漢の如くなりしに、今又、全然無經驗なる人人を以て宗教局を組織し、常に紛擾絶えざる難局に當らしむること、徒らに、彼等局員をして、窮地に陥らしむるのみならず、

宗教界の不幸も、亦決して尠少なからざるを推想するに難からず。

こゝに於てか、僕に一舉兩得の一策あり、曰はく、高等宗教會議を設くること即ち是れなり、教育の方面に於ては、會て高等教育會議と稱するものありて、最高諮問機關として、多少のお役に立ち居るが如く、近くは又教育調査會を設けて、大にお役に立てむとしつゝあるが如く、宗教の方面にも、此種の會議を起し、各宗教家……極めて廣義に解して、宗派に屬せざる有志宗教家をも含め……中より、議員を推薦し、宗教監督上の最高顧問となし、宗教界に事の起りたる時、如何にこれを處置すべきかを諮問し、多數の意見を聴取して事の真相を捕へ得たる上、これが解決に力を盡すことゝなきむか、庶幾くは、官廳はその監督の職責上、大過なきことを得べく、宗教界は、着々として自治の功績を擧ぐることを得む。

而して、この高等宗教會議の權限の如きは、略々教育界に於ける高等教育會議若くは教育調査會の權限の如くなるも不可なしと雖も、形式も内容も共に

教育界に比して、頗る複雑なる宗教界の最高諮問機關たるこの高等宗教會議の權限は、亦多少、彼と特異なるものあるを要すべし。これを制定すること、宗教界各方面の人々の意見に聽かざるべからず。切に、當局の考慮を促す。(六月廿

日の「中外日報」)

七、坊主家と宗教家

僕は、無僧論者なり、坊主不必要論者なり。否、更に進んで、僕の理想を言へば、世に宗教によつて衣食し、宗教を切賣りして生活を營む、謂はゆる宗教家といふものゝ存在を、必要とせざるものなり。

まづ、坊主の方から片をつけむとす。

夫れ、坊主の坊主たる所以は、寺院に住して、葬式法事のとを司るとこ

ろに在り。僕の如く、葬式も法事も、寺院や坊主にやつて貰はうと思つて居らざるものには、誠に以て無用の長物なりと雖も、世には、尙寺院と坊主との力を借らむとする、幾多の人あるが如し、これ等の人々のためには、當分これを保存するも、妨げなかるべきか。但、餘り坊主の頭數多きに過ぎては、今日此頃のやうに、米の高い時節には、少々閉口なれども、これ以て致方なかるべきなり。

坊主を保存せむには、單に坊主として保存せむことを要す。ゆめゆめ、これを宗教家として保存すべきにあらざるなり。由來、坊主と宗教家とが、その領域を同じうし來りしがために、生きたる人間の濟度を爲すべき筈の宗教家が、たゞ寺院内に居住して、死したる人間の始末をつ

けるを、本業の如くに心得るやうになりたりしなり。而して遂に、宗教家亡びて、坊主時を得るに至りし也。彼にして若し、家の字が美しくばよろしく坊主家と稱すべし、宗教家の名、斷じて許すべからざるなり。

然らば、宗教家とは何ぞや。

僕等の立場から言へば、これ以て、甚だ怪しいものなり。世に道德を行ひ道德を鼓吹する人あり、これを稱して道德家といふ。世に宗教を信じ、宗教を宣傳する人あり、これ呼んで宗教家といふ。然るに、道德家には、その人が道德家なるがための故に、何人かこれに報酬を贈りたりといふものありや、何團體か、これに月給を拂へりといふものありや。道德家は、道德を行つて、それに依つて衣食せず、道德を鼓吹して、それに

よつて生活を營まざるなり。否、世に道德家といふ職業は、これなき筈なり。自己の生活上の保證を、道德を行ひ道德を鼓吹するといふことによつて得むとする人は、これあるべからざるなり。然るに、世の謂はゆる宗教家は、宗教を信じ、宗教を宣傳することを以て、職業なるが如く心得、自己の生活上の基礎を、こゝに置かむとしつゝあるなり。否、今の世の滔々たる自稱宗教家は、悉く宗教を賣り、信仰を賣つて、これによつて生活しつゝあるなり。思へ、衣食に道心なく、道心に衣食あることを、衣食を目的として鼓吹する道德は、道德そのものにあらずして、道德の形式なり。衣食を目的として宣傳する宗教は、宗教そのものにあらずして、宗教の殘骸なり。形式と殘骸も、とより人心の根柢に培ふにも足

らざれば、人の心の緒琴をかき鳴らすにも足らざるなり。

姑く、坊主家の存在を許せ、宗教家の存在を許せ。而して坊主家と、宗教家とを明瞭に區別せよ。

坊主家は、全く坊主家たれ、神主と神社との關係の如く、坊主と寺院との關係を保たしめよ。神社と神主が、國家若くは一縣一國一郷一村といふが如く、團體としての祭祀を司るが如く、寺院と坊主とは、上は天皇とか皇族とか、下は權兵衛太郎作の如きに至るまでの個人の葬祭を司るべし。神社も等級により、國家の待遇異なるが如く、寺院も幾多の階級を設けて、之が待遇を異にすべし。神社と神主とが、神社局の下に支配せらるゝが如く。寺院と僧侶とは、宗教局の支配の下に置かずして、別

に寺院局を新設し、こゝにこれを統率するを可なりとなす。神主が「職員録」の片隅に、六號活字で填められて居るが如く、坊主も亦「職員録」中に、その名を掲げて遣はずべし。而して寺院の維持及坊主の生活は、例の寺院境内地還附、その他の方法によつて、優にこれを辨ずるを得む。

神社及神主は、神社局に屬し、寺院及坊主は、寺院局に屬すとせば、今の宗教局は、全く仕事が無くなつて仕舞ふなり。宗教局の仕事の無くなるといふことは、當然のことにして、結構この上もなし。元來、宗教は、俗權の下に支配され、束縛されるが如きものにあらずして、超然として俗權の上に立つべきものなればなり。束縛もなく、干涉もなく、保護もなく、恩典もなく、全く自由に放任して、その榮枯盛衰を自然の判決に一任

し、こゝに始めて、實力あり優秀なる宗教は勢を得、微力劣等の宗教は、衰滅すべきなり。

宗教とか信仰とかいふものは、人の心の奥底より、自然に湧き出づるところの、強烈にして且つ餘儀なき要求にして、この要求は、畢竟個人的なるものにして、萬人悉くを、同一教權、同一信條の下に、盲從せしむるといふが如きは、到底不可能なり。姑く類を以て集りて、こゝに始めて、世界の佛教信徒約何億、基督教信徒約何億といふが如き、統計を見ることを得るに過ぎず。仔細にこれを見來れば、淨土眞宗の一分派たる大谷派の中だけにさへ、また幾多の異りたる信仰を鼓吹しつゝあるものあり。凡そ此の如き、人間の内面生活に屬する事件を、外部の規矩準

繩を以て、彼此と、さまりをつけてゆかむとすといふが如き、今の日本の宗教局は、全然無用の邪魔物なり。

坊主家と宗教家とを混同して、これを宗教局といふ俗權の下に置くが故に、こゝに、諸種の困難生ずるなり。嘗に然るのみならず、坊主の腐敗墮落は、直に宗教家の腐敗墮落と目せられ、語るに足るの坊主なしとて、直に宗教界人なしと歎くが如き、畢竟、坊主家と宗教家との混同より生じたるの誤謬なり。先き頃も、内務省に於て、坊主や牧師達を集めて、以て宗教家の大會を催したるが如く傳へたれども、實はこれ宗教家の會同にあらずして、坊主家の會同なり。宗教の眞精神、宗教の新生命とは、殆ど没交渉なる、教會の留守番と墳墓の掃除役との會合なり。これ

を以て、折角寄り集まりながら、折詰辨當を食つて別れたといふことの外、坊主家それ自身にも、社會一般に對しても、何等の印象をも遺さず、何等の影響をも與へず。而して今や、お約束の七十五日を過ぎて、全く忘却せられりたるにあらずや。

坊主家と宗教家との異なる、それ此くの如し。坊主家は職業にして、宗教家は職業にあらず、坊主家は葬式や法事を營んで、依つて以て衣食し、宗教家は、自己の職業の餘力を以て、自己の信ずる宗教を宣傳し、而してその宗教を宣傳するといふことによつて、生活を營まざるなり。換言すれば、宗教を賣つて衣食せざるなり。聊か我田引水の傾きはあれども、最も適切なる一例を挙げしめよ。我が新佛教徒中、新佛教によつ

て衣食せるもの一人もあることなし。否、常に我徒の貧しきポケットより、新佛教宣傳の費用を支出しつゝあるなり。或は教師を職とし、或は新聞記者を業とし、或は著述に従事し、或は會社に入り、或は小賣商人となり、各々一定の職業によつて、その衣食を辨じ、その生活を營む。若し宗教家といふ名を與ふべくむば、實に我新佛教徒の如きは、理想的宗教家と稱すべきなり。されど、たゞこれ我徒が一片耿々の志、止まむと欲して止む能はざるに出でたるものにして、決して宗教家を以て自ら任ぜむとするが如き志、毫末も存せざるなり。否、今の時の如く、宗教家といふ名稱の濫用せられ、宗教家といふ名稱の墮落せる時に當りては、宗教家と呼ばれむこと、寧ろ甚しき屈辱を感ずるなり。迷惑なり、厄介

なり、御免なり。

僕が、卑しむべしと稱せられて居る小賣商人を業とし、しかも新佛教徒の一人たるが如く、我徒の中には、又卑しむべしとせらるゝ坊主家を職とせるもの少からず。坊主家を職とすと雖も、これたゞ職業としてこれを營み、これによつて生活を爲すといふにとゞまりて、坊主家と宗教家とを混同して居るにはあらざるなり。職業としてこれを言へば、その人道に反せざる限り、小賣商人たると、新聞記者たると、坊主家たると、車夫たると、何等尊卑の別あるなし。その尊卑は、實に事にこれに従ふものゝ人格の高下に依る。坊主家を業として、餘力を以て宗教の宣傳を爲すも、學校教師を職として、餘力を割いて己の信ずることを人に

説くも、その間、何等の差異あるなし。たゞ、僕のこの要旨は、坊主家と宗教家とを混同することの非なることを明にし、彼と此とをきつぱり分別して、坊主家は職業なれども、宗教家は職業にあらず、従つて、宗教家といふ特別なる階級世に存すべきものにあらずして、政治家も宗教家たるべく、道徳家も宗教家たるべく、學者も宗教家たるべく、商人も宗教家たるべく、坊主も、神主も、牧師も、藝人も、凡そ人といふ人にして、自ら信じ人を信ぜしめむと欲せむもの、悉く宗教家たらざるなきを言はむと欲するに在るなり。

されど、諸君、宗教家といふ名に執着すること勿れ、僕等は、宗教家といふ名さへも、これを欲せざるなり。諸君も僕等も、共にたゞ、宗教信者た

れば、以て足れるにあらずや。「親鸞は、弟子一人も持たず。」といへる態度は、以て諸君と僕等の、範となすべきものならずや。(明治四十五年五月十八日「新佛教」)

▲青年僧侶の行くべき道

青年・宗教家と雖も、苟も人間なる以上、人間の行くべき道を行かざるべからず。人間の行くべき道は、たゞ向上の一路のみ。この向上の一路を、進せむには、自己の信仰を、發動機とせざるべからず。信仰の發動機なくして、進まむことの難きは、羽翼なくして、飛ばむことの難きよりも、難しとなす。

少しく、實際について説明するを許せ、夫の舊信仰に満足するものは、舊寺院にとゞまりて、舊佛教の宣傳に努むるを妨げずと雖も、苟も舊信仰に満足せざるものは、舊寺院を捨てざるべからず。而して二者共に自己の信仰によりて、向上の一路を前進するものたるや、即ち一なり、たゞ舊信仰には満足する能はざ